



拾遺和歌集

特別  
8099  
3



八4  
8099  
3

拾遺和歌集卷第一



春

平ささふ人の家并合よしのゆかり

云生忠岑

<sup>抄</sup> 春のあふふゆかりの音野山も千の念けさかたむ

和平日年中宮の賀しゆかり時の屏風のさ

弘文館

<sup>抄</sup> 春霞をらぬか事いさむ乃年の山ありこゆりあけり

かすかるとのゆかり 山邊赤人

昨日に九年はら新しう春霞がすりの山よとやまよる

冷泉院東宮よ松をくまきりたる時をそと戸つと  
おをきり被りぬ 源重延

吉野山峯乃白雲つらき人をもとむる鹿のまじりてん  
延喜御時月次御屏風

奉性法師

あたまの年之御初らむともく海物うらむあふ  
天曆御時方合小 源順

秋たよこもぬ春の音風よまじりてぬ鶯も夢  
歌一ら次 平治集

春きて朝の原の雪をまきりたる年の深きとこれ

はくちんあふ春小 みつね

春きて朝の原の雪をまきりたる年の深きとこれ  
歌一ら次 よも人あふ春

つやらの梅よまじりてくまきりたる年の深きとこれ  
天曆十年三月廿九日由家寄合小

中納言朝忠 抄中巻

鶯乃殺すらりせよ春きてぬ山所といふともく被りぬ  
うらむいふはらむいふ春

うらむいふはらむいふ春  
歌一ら次 抄中人廣

梅花をいとも月よりよき花にあまほる雪のあてふれと  
延喜御時宣旨よていともよき花のあてふれと

はつね

ひめくもありのかきしては白雪のむらたりにあつて

同御時御屏風よ みつね

あり雪よあまほいぬ梅をかよこそふたつ物よりえ

冷泉院御屏風の志よ梅花あり家よまじうとき

たつね 平急威

つやの梅のしらとやんふのやよきつね

齊院御屏風よ みつね

かきとえては梅のあつては梅花あまほる雪のあてふれと

長そめゆとあつては梅花あまほる雪のあてふれと

白梅のしらとやんふのやよきつね

影のしらと 人麿

あつては梅のあつては梅花あまほる雪のあてふれと

恒作右大臣の家御屏風

野島万金とてつよつとよらひしそかきぬあまほる雪

つよつとよらひしそかきぬあまほる雪 同御時御屏風

かすろめあひの年うしほはとがせあめらめら

歌一す

大伴家持

善くあめらうしほはとがせあめらめら  
にきくはうしほはとがせあめらめら  
子うしほはとがせあめらめら  
み葉ようしほはとがせあめらめら  
けりけり

ちろくまをうしほはとがせあめらめら

歌一す

ちろく

ちろくまをうしほはとがせあめらめら

入道太郎卿うみこのあまのうしほはとがせあめらめら

大中長うしほ

ちろくまをうしほはとがせあめらめら

延喜所対以屏風よ水のほらめ梅もさるる

ちろく

梅花うしほはとがせあめらめら

歌一す

ちろく

梅をうしほはとがせあめらめら

神をうしほはとがせあめらめら

神をうしほはとがせあめらめら

兵部卿元良親王

あこまう記にたてをたつ梅花のよれ風のうらさい

みつ祢

吹風とふふといん梅をらりうの時をかまゆり

大中臣能宣

白とは風よきをも梅花あきあやみふらうと

よこ人しう教

このよれ風のうらふを青柳のうらは中くこれあら

屏風よ

大中臣能宣

りくしてをきし由らあきよきの線らしてをたうう

歌しう告

凡河内躬恒

青柳う花田のうららあきをそそ守をさの道志と

よこ人しう教

花久まきじまてゆきよも青柳の線ららあらうう

子よまらうをくもてゆるるう東山よこりて

中務

あきほらうとく祢いひし山梅ううせぬ花あう

歌しう次

吉野山たると霧のうらいくく人あきまぬ花あう

天曆九年内意う合よ

よこ人しう歌

あきこころしよ花中も凡む山樞峯此白やこころあつた  
歌しう歌

吹風あつたしう花てあつたきよの山樞樞がうまひは  
壹家万葉集の中

浅緑のうらあつたあつたもこもこまてよあつたあつたあ  
歌しう歌

若野山きこせぬ雪しよきりか峯つぎあつたあつたあ  
天曆時藤景殿女御と中納更衣とあ合しうあ

清原元補

春霞立ちあつたあ花あつたあつたあつたあつたあ

平きこあつたああ合しう

そくしう歌

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

賀正屏風よ

藤原子景

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

天曆時屏風

そくしう

春あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

歌しう歌

在原元方

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ



永平四年中宮の賀一給々時の屏風

齋宮日侍

春の田と人あまをて秋とてむよ心とつくふらるる  
宰相中将敦忠朝臣家の屏風よ

はらゆき

あぐれはららせとむ里の芳あまのあまを  
斎院屏風中山のゆく人あま

仔細

はららるはらきう海りしはらあまのあまを  
はららるはらきう海りしはらあまのあまを

はららるはらきう海りしはらあまのあまを

はららるはらきう海りしはらあまのあまを

はららるはらきう海りしはらあまのあまを

回轆院御時三尺御屏風よ

平為威

花のあまのあまをて秋とてむよ心とつくふらるる

はららるはらきう海りしはらあまのあまを

はららるはらきう海りしはらあまのあまを

はららるはらきう海りしはらあまのあまを  
権中納言義懐家の屏風の花あまのあまを

藤原長能

身よそてあやめ花を惜かひきくはのりぬるこえあ

歌一十次

よみ人あきと

足まてあぬ花のりりりふゆ宿程つらきとれらやとひこ  
ありけしる霞といひけしりいさひのちあきまひく

天曆御時屏風よ

藤原清公

ちりぬき花のりすの程のちりきくわのりりり

歌一十次

よみ人あきと

しきも花のりあきりめいけりあつそりあきわのり

屏風

うしゆ

ちりりり花のりあきとあつあきわのりりり

歌一十次

よみ人あきと

足もそとゆくとあきり花よきとあきりりり

延喜御時ありつたの女御あきと

あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

あきとあきと

恵孝は師

あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

春あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

亭子院弄合よ

あつらふにありし風はさびしきとてさかじきおぬをたより  
歌しす

かきまの山はらけの桜花もさかきとてさかじきとてさか

天曆御時合よ 小貳命婦婦

けしきれ山のけしきありけしきとてさかじきとてさか

歌しす

かきまの山はらけの桜花もさかきとてさかじきとてさか

天曆御時合よ

かきまの山はらけの桜花もさかきとてさかじきとてさか

かきまの山はらけの桜花もさかきとてさかじきとてさか

惠美法師

山吹の花はさかきとてさかじきとてさか

屏風よ

物もさかきとてさかじきとてさか

歌しす

かきまの山はらけの桜花もさかきとてさかじきとてさか

わやまの山吹はさかきとてさかじきとてさか

亭子院弄合よ 坂上是則

花のさかきとてさかじきとてさか



拾遺和歌集卷第二

夏

天曆御時乃奇合り

大中臣能宣

なほとほまもさきうねもせみあはれすれあはらそき

屏風よ

あこふ

わやまのかほやとほへさだなきよけりと久中卯花

冷泉院の東宮よたうまうけり時百首うちそと

つよしとおほせし進められた

源重之

花乃よそりたりの節に家久う来々うとあは

たりのそく火よよとゆる

威明のみこ

をらうといひ物となれもろをそと風とまらる

百首うち中よ

あこふさ

なよとほまもさきうねもせみあはれすれあはらそき

国朝院御時屏風

平かねえり

任者の岸れあらあこわやそめ杉のこすあよあこふ

あこふ

紫のうらけのこすよとよみなりしはかたをり  
延喜御時花名舎にて藤花宴のり時よ

小野宮冬政大臣

<sup>ナ</sup>牛くくをきてはる藤をいしきよあはしとを魚

影あす 躬恒

ものれくけむしあを春花にいはる海をわらふ  
そこのあうの藤むとらんゆく

柿本人麿

<sup>万</sup>だの浦はうはる藤浪とあしてゆんかぬ人のあ  
山室の卯花ようくむすのをさゆらると

平ら誠

<sup>サ</sup>卯花とらりあしちよまうてやなるよと稱は書のかく  
歌あす

<sup>サ</sup>うのえんはらうと稱はりのくゆはれ由の浪と  
延喜御時月次以屏風よ

みつね

<sup>サ</sup>卯とら卯月よと卯の卯花はうらうとよと稱はる  
つゆ来

かまうつやしの卯花はあはみくうとをあまはれ  
歌しる

よかん人あは



天曆御時の方合よ 云生忠見

西東もきし福さあけりせの部と人さしよえきく物

たう山部の御屏風よ 伊璠

<sup>後推</sup>ういふときくはあに部と和深くあやふしき

小宮のりさ此屏風よ 源石忠朝臣

ゆさやして山部くつれきと今部よあのきつ海りよ

敦忠朝臣の家乃屏風よ

つゆさ

いりきにいりか人うんかして山部とくはさく新巻

延喜御時の方合よ

よと人さす

はそこれらうくそんじしよはあやの部よみさあいは

屏風より 大中臣能宣

眼のくよそい思あやあささうわやとのつもとみか

歌しらす よと人さす

きふ人連と玉のうてあそかりらあやあはああいかりの

延喜御時

葦の乃山部よあやあやああああああああああああ

よと人さす

たかたよ思いよあて部と花梅乃ささふたうく

天曆御時の屏風よりあやああああああああああああ



生志見

いよにすまひしゆくし部をよみしはたまたま  
しむらひゆいものあつたしゆのをらふか  
小野宮の長家屏風下り口より一方の部を  
なまじらふてあつた

かのよもやまししせよ部を道よるまはた  
いよふらの家のまゝみつね

部をよらふまはたしゆらふまのまはた  
部一らふ

なまあつた田の部のまはたのまはた

いよにすまひしゆくし部をよみしはたまたま  
いよにすまひしゆくし部をよみしはたまたま

大伴坂上郎女

部をよらふまはたしゆらふまのまはた

中務

なまあつた田の部のまはたのまはた  
あつた田の部のまはたのまはた

春宮よまはたしゆくし部をよみしはたまたま





拾遺和歌集卷第三

秋

あきのほし秋よよみゆきり

安法三所

夏秋まといふかろく秋よよみゆきり秋のく風

新らあ

あき人しね

秋よよみ秋田の山とて秋よよみゆきり秋のく風

巡喜河内屏風

あき人しね

秋のまろくくをくく秋風のく人かろくく秋のく風

河原院とあれくく秋よよみゆきり秋のく風

よみゆきり

惠慶は所

あきゆきり秋のく風

新らあ

安貴ま

秋よよみ秋のく風

巡喜河内屏風

みつね

いよほのつちあき秋のく風

あき人しね

秋風よ秋のく風

新らあ

栞平人しね

あきの河をく風

天のこゝれは霞のうららのあきもひさしに秋のききふる  
よき人しらす

西のききふるあまのつらきいふかき思ふまよひのききふる  
湯原ま

むらりの思ふまふ事らもる我らうーのんてあは  
人まら

年よ有ていよふふあむらうー我ままらりて思ふ  
近世河村月次河屏風下

たのしいよなきてうらる唐衣のききふる神やあらん  
いしゆん

右衛門待源清蔭家の屏風よ

むらせよいよとてなとらふはひのあむらむむ林のききふる  
左兵衛待藤原懐平家屏風下

惠慶法師

いふよとらう月日はたのしいあまのうらむ思ふまら  
七夕庚申よあまらてゆるり年

いよとらういよとらういよとらういよとらういよとらう  
いよとらういよとらういよとらういよとらういよとらう

いよとらういよとらういよとらういよとらういよとらう  
いよとらういよとらういよとらういよとらういよとらう



秋の野の花をそに女鳥をかくすのこころし人よわらぬ

紀貫之

かりよそそ秋をきる事とともあふしつるよ心を思つ来りぬる

陽成院御屏風よこころとてしつらり所

さらし人の心をまてしをこころしむのこころを寝きりつる

亭子殿の御人よ前裁うへを後くこころしつる

こころありあらし 伊勢

裁とてあらしめゆ花をれおむる人よあはれとてん

歌らす よみ人こころし

こころし秋のこころしつるのきこころしふさふさ

少将よゆりつる時こころし人よわらぬ

大貳 高遠

相坂の園ありしころとてあはれしつるこころしつる

延喜御時月次御屏風よ

源三をり

あはれつるの園ありし水は秋をそ今おいらむのこころし

屏風よ月次御屏風あり家よ人あはれしつる所

源三をり

水のなほよそ月浪をかきこころしつる秋のこころし

あはれつるの園ありし水は秋をそ今おいらむのこころし





伴甥

いほこも弟の抱とすしひいほこも思はれど  
屏風よ つらゆい

秋れいささる虫のありまは唐錦もも乃由の野人か  
影一雁と

契留種や過ぬり秋のゆ人松虫の登るも  
三つ祢

露もくてつ衣手は好むぬも折とと中人秋と  
亭子院御屏風よ 伴甥

うつろむし事うか惜き秋萩と榎ぬ許しとる露那

三條のきさつらさのきさしゆらる屏風よ九月九日  
乃所 ちとす名

ワヤの兼丸白露をさしつとせつとて閑とあり秋  
影一雁と

長月のさぬとつむ菊の花もいあつたよ  
右大臣定圓家屏風

千鳥のくさのけきり立ぬらあつたよ  
たみ子

延喜御所の御屏風よ つらゆい  
風さむつら衣うつめを萩のしだもあまあり

三百二十首の中へ 曾祢叔忠

秋風のこもろれ山とくまふしとてまうけあひあひ

野らす 又中尾徳宣

紅葉のいづれに吹風のよもあはれとてわらん

もあはれとてわらん 秋風のよもあはれとてわらん

よもあはれ

秋風の吹涼とてあはれとてわらん

あはれとてわらん 秋風の吹涼とてあはれとてわらん

とてあはれとてわらん 秋風の吹涼とてあはれとてわらん

あはれとてわらん 秋風の吹涼とてあはれとてわらん

惠妻は師

もあはれとてわらん 秋風の吹涼とてあはれとてわらん

野らす 又中尾徳宣

秋風の吹涼とてあはれとてわらん

もあはれとてわらん 秋風の吹涼とてあはれとてわらん

あはれとてわらん 秋風の吹涼とてあはれとてわらん

紅葉のいづれに吹風のよもあはれとてわらん

野らす 又中尾徳宣

秋風の吹涼とてあはれとてわらん

野らす 又中尾徳宣

水のあやよ葉の錦うさねつらきよ浪のこねは  
西宮たぐは家の屏風よさうのしこめは  
りくーたら女ともをみりそあり所

あふふ

若ときげら若きうらのしめれとさうき秋のまよはり  
東山よりみり及よまらして又のりつとさくまら  
るうとよとゆる

惠慶法師

昨日らうままらわらもらうのあじらあきとんて  
天曆御時敵とらをうこも紅葉及よと并まら  
らうよ

源延光朝臣 大納言

りみり葉と年こしにわりてうぬりあ風のやもうらさ

源兼光

先祖不見  
大納言浦兼光

校みりてもらんもらうのたんはしらりしと花はれ

野らじと あやふ

河原此方原にありてまぬまはるもた秋の山いんけ  
ちくうさふまうてゆるり時りみりのをき乃水母  
うつりてゆるれは

法橋觀教

後大信神 延慶

水うみよ秋の山とうつていそいけりいろき錦とをみ  
二葉を大長乃栗田の山とれ漳子乃忍よたひん  
もららのうたあやらう所

惠慶法師

今ら紅葉の山にさき行む接の目すし

野ら次

よた人ら次

今人今節の山を人相見ぬとるう

延秋御時中言御屏風よ

はら中

ららぬきの紅葉と秋のやうにたすき

歌ら次

信正遍照

秋山あらしのこゑきく時このとらぬ物さう

はら中

あきの朝はぬときさうてあゆむ風よ

あらしらんうよこをわらうあまらる紅葉よ風のあらし

風の山ありなまらるる秋のこゑ

ゆめれ

右巻門書と仁

あきの山に風の山に紅葉の錦きぬ人

題あら

秋の山の峰あまらるるあらし

大井よ紅葉の山を

生忠彦

あらしのこゑを

影しうじ

うしうじ

まゆみとてまじこまゆみ秋ゆふあまこころ花すこさ  
くれの秋重之うせうれこころゆかりせしよ

平急感

から秋ゆく秋のこみゆとてゆらりゆらゆらふんふん  
けり

拾遺和歌集卷第四

冬

延喜御時内侍のうら賀丸屏風

紀貫之

あむきの山うきをりそくれと巻ふてらにゆかり  
貞和二年清凉殿のこりりふりりうけり

よこ人しう次

細休よまきつ淡唐錦口とてよらるる葉たりり  
あゆしゆら日しうゆき

かきくしうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
れれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

影ら次

うらなうらな

神月時雨しほくさのふれくさる神は廉しあり  
奈良のみし龍田河は紅葉以次しは初幸あり  
けり舟はこもふつうゆりて

柿本人麿

<sup>七</sup>龍田河も久ら葉をくさる神のいとしむらの山は時雨さし  
ちりのこもくさるもくさるもくさる

信正遍昭

<sup>カ</sup>唐錦校よむむじのこはか秋のこもくさる  
延秋の女室のみこは家の屏風よ

はらゆら

流るりみりかふさにかつあきさ灘のこもくさる  
屏風よ 平甚威

<sup>サ</sup>時雨のくさるくさる紙よえ人のこもくさる  
百首并の中よ 源重之

<sup>ガ</sup>あつのはらかられはとまかつのこもくさる  
影は流る つらゆら

<sup>チ</sup>思ふねららゆきは冬の舞は河風さしむらりあり  
よこ人あつ次

えおよすいかにあつあつありありありありありありあり

白樺

水とまじりて神といふてまげとて一らの浦に  
水なる一とて思ふおの思ふおの思ふおの思ふ  
水なるおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ  
おの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

霜のうらみおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

影うらす 左衛門猪子仁

おの思ふおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

おの思ふおの思ふ

池水や氷ころろとあつらひの事づくさるさるなりけ

化友則

おの思ふおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

おの思ふおの思ふ

水のうらみおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

屏風よ 平益盛

おの思ふおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

おの思ふおの思ふ

おの思ふおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

恒流る家の屏風よ

おの思ふおの思ふおの思ふおの思ふおの思ふ

おの思ふおの思ふ

高初乃松よとびつるそくしおのた頼やとれまゝるん  
影くらす 礼もつり

いふたれはたのうらうほきは友ましとせり千をめぐ

人麿

暮浦りくちりる雪はち海の末乃松山にすりととみれ

麿義の家障子

ひとすき

その秋乃池志水のあけはに月の方のみくまりり

影くらす

よの池乃人水よさらぬまてくそり月めりこい冬も

月とたてより

惠をけし

あまの奈らくはとや海に水とたかその秋乃

よう書とよあり

源京明

雲こもちつととたつる雪はくはよありや一

女をさる毛ゆかり奉らまらゆよれとい

くゆるたしゆきのありゆかりふ

もすす

たつたははらうらとあつたあまのうらとたつた

らあぬよ雪のこもりこもてゆかりと

伊勢

かこまのふのよとむら白雪はむら衣の深をす



齊院の屏風よ

つゆ中よ

よ秋の月をそよみしつゆの庭のまをさつる  
影をらす

つゆの雪よつきてそよみしつゆの庭のまをさつる  
屏風のまをさつるつゆのまをさつる

藤原作忠朝臣

送信上在中并  
友政補尹等

我はりのこよの山をさつるつゆのまをさつる  
影をらす

年をさつるつゆのまをさつるつゆのまをさつる  
入道権政の家をさつる屏風下

影をらす  
影をらす  
影をらす

かみそり

影をらす  
影をらす

影をらす

影をらす  
影をらす

人まら

影をらす  
影をらす

影をらす

影をらす

影をらす  
影をらす

影をらす

影をらす  
影をらす

かねを利

人<sup>サ</sup>も春と花ははらばらとあはれなふとあはれなふ

屏風

うゝふ

あはれなふとあはれなふとあはれなふとあはれなふ

右東門狩り

梅<sup>サ</sup>もふりつじ花はひらきあはれなふとあはれなふ

屏風のよは佛名り所

うゝふ

花はあはれなふとあはれなふとあはれなふとあはれなふ

延喜時<sup>サ</sup>の屏風よは佛名り所

年の内よはあはれなふとあはれなふとあはれなふ

屏風よは佛名り所

あはれなふとあはれなふとあはれなふとあはれなふ

うゝふ

君<sup>サ</sup>も山はあはれなふとあはれなふとあはれなふ

屏風よは佛名り所

かねを利

人<sup>サ</sup>も冬と雪はあはれなふとあはれなふとあはれなふ

齋院の屏風よは十二月つこゝろり所

かねを利<sup>サ</sup>もあはれなふとあはれなふとあはれなふ

百首奇なり

源重之

中二のりなる年とてさうとてさうとてさうとて

よきとてさうとて

拾遺和詩集巻第五

賀

天曆御時齊宮々々りゆる所の長奉道使々々

とらわらむとて 中納言朝忠

よる世の始とけをいひとて今め未だ未だを  
けり久く平野系よ男使々々りうとてさうとて

よきをいひ 大中臣能宣

りやあひしれ枝の枝けとて千世とてあひしれ  
仁和の四時大嘗合の奇

よき人とてさうとて

かきつりなき海にひらけしは千をいふもよれり  
贈皇右宮のほうと七車よ号部の後平のそ  
ろきつりなきとて千をいふもよれり

清原元補

あさまにさしつるふとふそまきし千世のりまの始成き  
藤氏をうらやよまらして

うらや

あつらひらたのちかばちかひらたのちかばちか  
うらやの七車ゆきらして

あつらひらたのちかばちかひらたのちかばちか

右大納藤原實資うらやの七車よ

平うねり

こころいのかねぬふたりにさらはらの花と  
あつらひらたのちかばちかひらたのちかばちか

千をいふもよれり  
藤原識信元服しゆるきとて

源うらや

あつらひらたのちかばちかひらたのちかばちか  
みらしのみよきとて

うらな

花のさつりあいのこぼれに花のあやうきと  
天曆れいし軍十よりなるけり付らぬ寺  
ゆ金張壽命絵か十巻とよき借巻しとま  
て御巻教はりよふきすふたをり  
そのすこれと地はあまきりいあてふら  
お祈り

お平年中宮の賀し侍り時の屏風よ

齊宮内侍

お平年中宮の賀し侍り時の屏風よ

お平年中宮の賀し侍り時の屏風よ

お平年中宮の賀し侍り時の屏風よ

齊宮内侍

お平年中宮の賀し侍り時の屏風よ

お平年中宮の賀し侍り時の屏風よ

かねもち

ついでにさげらるる花よりちをさるるもあつた  
にまゝの七十賀しゆるに竹のつとよひらて

うしよ

あつたあけまゝの竹の枝あはまゝもつまねてそのまゝ  
佐山筆まてはらる杖をまて今らる所ののりたも也

一条樺政中おのりる時又のまはる五十賀しゆ

けり屏風よ 小野女古朝臣

吹風よよれり紅葉らるるねとあつたときけの影をたはら

持中細言教忠母の賀しゆるよ

源石忠朝臣

よるにともれあはれあつたあつたあつたあつた  
也兼内侍のみの賀民部卿清賀しゆる時

屏風よ 伊勢

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
春の節のつらふとねときりあつたあつたあつたあつた

天徳三年同重よ花宴をほせ給るよ

九條右大臣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
影しらす よみ人しらす

かたはらとせの春とすんまはらつらむのまよあつて  
亭子院まよ

みつね

康保三年内意うくみせしをばらり小殿上はら  
ことし初まつらまはりつらふ

藤原のまよ

小節宮大政大臣家まよ  
けつふらふまよ  
三條大政大臣 廣義

かたはらとせの春とすんまはらつらむのまよあつて

延喜御時御屏風よ

かたはらとせの春とすんまはらつらむのまよあつて  
かたはらとせの春とすんまはらつらむのまよあつて

糸儀伊衛

かたはらとせの春とすんまはらつらむのまよあつて

天曆御時前載のしんをばらりつらふ

小節宮大政大臣

かたはらとせの春とすんまはらつらむのまよあつて

廣義の家として人々よこしよませゆるりおん  
りそりれらりのむしとふ影を

平惠盛

ちよせより弟びいこむせいのむらぶね松原れおのあり  
右大臣源のいりの家は前載ありゆるりまを  
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

しんせい

サ  
千の年の千とふ尺じゆいり千とあくなりゆるりゆるり  
天廣時清信のあもそとゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

御座り

木いじの祿らえちる春や竹のすあめあくみんせ  
かたにをゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

伊勢

サ  
千をゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
影いらす

サ  
きふはあはれをゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
賀の屏風よ

ういせあはれゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり  
かたつらゆるり



拾遺和歌集卷第六

別

春もあまらけり人よあつ月よしてさつかりこまふ  
てこまりゆかり人のよみゆかり

よき人あはれ

春霞ふちる月よかりに心をせうふりぬるうたを

野らうす

あつるあつる月よかりに心をせうふりぬるうたを  
ちのたし道かたぬまてうまゐんわろくをさうやとゆかり  
えのさうらけり人のよきいんくまらてうらうあ

さうて

曾孫あうらう

かりのゆきまけをわらひ雲のさうらうに思つら  
天曆御時小貳命母を前よまらゆかり時大とん  
よそ錢をかせたまふあうき物たまふとん

御製

夏衣ならゆかりき今春よそひまはれき男ういね  
野らうす

わらひぬまらぬわらひぬたつたすのこれ枯風や谷ゆき  
別て事いれり始らんうらまき物とまらあかりん  
あつるあつる月よかりに心をせうふりぬるうたを

天曆御時九月十六日舟宮くらり侍りよ

御製

樂子天曆皇女母訂の中御  
廣明女

長世と長月とたゆみの身をたけり母別りあけり

十月はゆきまらりけりよ

たみ

病よふあてしと思ふ念ひはあつらひよ

ゆきまらりけりよ

さしあがり

つらきよとあつらひの思ふよとあつらひの思ふよ

あつらひ

別てあつらひしあつらひしあつらひしあつらひし

つらきよとあつらひの思ふよとあつらひの思ふよ

あつらひ

あつらひ

別てあつらひしあつらひしあつらひしあつらひし

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

とく

赤澤忠門

情とておれ物中人あらずの渡しきけいふこゝろぬれ  
源ありくぬる冬河のともをきてゆるりじすあはれ  
ぬるのよきとてしつらうり

りあもふゆぬみうらぬつはふあふのいぢぢぢぢぢ  
かねよりとらうらうらとせとらゆるらじぢぢぢぢぢ  
きくゆとて 源くそとて

別地らそらけしとせぬゆとそらつぬぬい渡り来  
志すのくぬくそららるるぬきいふらうりぢぢぢ  
いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

月影とあつととらるるともはらぬらぬらぬらぬらぬ  
そ政朝臣肥後おもくそらゆるらりよ書あひをん  
そらゆるれらうらうらうらぬらぬとたまふとて

天馬御書

つられふたのそをけうらうらとあふ書はとら神  
天馬御書ゆとと肥後うてとらぬくそらゆるら  
せんゆららゆららつららららららららららららら  
とくゆららららららららららららららららららら  
ゆくゆららららららららららららららららららら  
おらららららららららららららららららららららら

こころのしるしはゆかりのふ　　四つの子のつゆ

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

女房人冬河

あつらの草はよき人へ　　しるしをまづる神をまつる

野々々　　よみ人へ　　つゆ

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

源氏宗りのまゝに　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

三條太皇太后宮

あつらの草はよき　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

つゆはまがたか　　つゆはまがたか　　つゆはまがたか

そのくいにのこしむまのまらるるのけりお輝正を  
及ころかややくはらりけりお

戒秀の法師

<sup>サ</sup>が先山よいらすりのの南あはれさしひのふしお記列お  
藤原ろまよさうか考あまよゆる時あーりお  
かつたしとそらゆるきりおむじのさあむきしゆた

藤原清正

<sup>サ</sup>思ふあつあゆむまらりと情をさけいかりあき  
肥後まよ清原元輔そらゆるるよ源満中亮  
ゆるりあうらけりて

毛とすあ

<sup>サ</sup>いり洋思さむじとらうんたてさうらことと記さるは  
を

源満中朝臣

<sup>サ</sup>君はりし末をさしこまりあはれむいりお人  
野さす  
よら人あらあ

右末門 源隆女

そらあはれむはむは白雲のさあむいりあ  
命とさあむいり思さし、まてさうらさよを絶  
いりまらるるあはれよいつらる

橘停年

昔乃、<sup>カ</sup>まの相承とては、つとれぬ人ともててよ  
 隆奥守とて、そりゆる時三條左衛門右衛門の領し、  
 ゆくれよとゆる

藤原為頼  
<sup>カ</sup>たまきの相とて、つとてあくまんとあつて、せり給あつて  
 くらぐ、申の白河開えゆるらふ

平為盛

昔らあり、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて  
 長徳元年二月十三日隆奥より、中御日還来、長保元年二月廿六日、平由門討来  
 實方朝臣、くらりのつとて、つとてあつて、つとてあつて  
 つとて

右由門持三任

あつたりのつとて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて

都つらなる  
 つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて

たをゆら、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて  
 恒速石家の障めよ、かねそり

あつたりのつとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて  
 たをゆら、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて

つとてあつて

あつたりのつとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて  
 つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて  
 つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて

伊勢

あつたりのつとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて、つとてあつて

郭公福くまうのこまきけをその抱えつわけり  
物(ま)らりからみらじくくろりをくまきそ

うーのふ

草花のゆきをすりぬきぬきぬきぬきぬき

野うら

うまうま

カ  
あとのこいつたひの草花露もきうぬあつ月を

源石真つ又湯すまりをらるるにせきこの夜して

月のあつるをらるるおつるあつる

平島威

とふうたまただひのさうまにまおらうまのたのた

秋のこまをいりつるよ、おのののの

うーのふ

とまうー我のまをせむいぬきぬきぬきぬき

ひうーくまをりらるる

重之

あまの草の抱しむすは神をまうて飛ぶとみれ

伸伴固はくくまらるる路なるわくをまれのなるよ

うーのふ

あつるのこまをいりつるよ、おのののの

なうたれゆてつるいもをせてゆけり

贈太政大臣 菅

そらとてのしほのこすあなをくことかろくまてまのりらふ  
かたしゆふうくそらうしゆとらてゆくらう時あ  
あうしゆうてゆくらふ

かみをり金器

仁明天皇御令  
和和四年九月十五日  
番口所給

浪のふまらうしゆまのきまらゆらうあはれ

そらうしゆ

かきのりらふ

あまのむらうしゆのけりらふ

人丸入唐事  
はるか分所見  
但上古事  
品可伝年



拾遺和歌集卷第七

物名

紅梅

よる人あはれ

うらむしのとらる枝を折すまのうらむと

あはれ

花のあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

いよやあはれ

藤原すき

補相 延喜格 古江 經 六男 藤原 長良 孫

そよよのあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれ

なみよあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

かよひの花

伊勢

わら海の本きあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれ

いよあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれ

あはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれ

あはれとてあはれ

うてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれ

河のあはれとてあはれとてあはれとてあはれ



わんざりといふはわんざりといふの事とて  
すんういふ 一〇二年 よじり

寫るすうにきいもあめあめ風もききせつらあん  
わんざり

少信ありありに我もきいといふに野中の事いふは  
いふみの

とみうろをたれおろし一もあめあめあめあめ  
くらすめ

白浪のうらうらすれうぬわんざりいふは  
こいしあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

おめあめ舟いふはあめいふ舟いふはあめあめあめ  
よこらふ 50人

在原元方

えんいふはあめいふはあめいふはあめいふはあめ  
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

少信あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふ 在東業平朝臣

いふいふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
くまのうらうらふはあふあふあふあふあふあふあふ

ふらうらうらふはあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふ よこらふ



め

すきん

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

らうん

よこくろく

たのきしきうんたのきあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時

よこくろく

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時

さうもあつ時よいたにたのころ来たる物と有

あつ時



いづれか

よみ人あはれ

あつたきもいづれか  
あつたきもいづれか  
あつたきもいづれか

<sup>少後</sup>春風あつたきもいづれか

まうら

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

<sup>少後</sup>あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

<sup>少後</sup>あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

<sup>少後</sup>あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか

あつたきもいづれか





拾遺和歌集卷第八

雑上

月と足代て

中務卿具平親王

<sup>七</sup>世<sup>下</sup> 世のふももよとくもよも月とくふもよとく

清信の家屏風よ ころ中

<sup>七</sup>世<sup>下</sup> 思事有とありにふ本の月とくれ新進のり利

失くまるとしてゆくらふ月と足代て

大に為基

<sup>七</sup>世<sup>下</sup> おしつち物事ありあふもよ月とくれ世のりあふもよ  
け師よあふもよとくふもよとく月と足代て

藤原のつらき

<sup>七信</sup>かみ許通くくたひり世中よくににんはあひのりか  
冷泉院の東交よたうまうしりあひりあひりあひり  
なりのこもよとゆるりり

藤原仲文

<sup>七信</sup>あひりあひりの月ろひらなまらりあひりあひりあひり  
糸織玄とつめり月のあひりあひりあひりあひり  
せうえいこいし道てのくれ

伊勢

<sup>七信</sup>くのおあてあひりあひりあひりあひりあひりあひり

花山よまらりてゆるりいしあひりあひりあひり

素性法師

<sup>後撰</sup>あひり月のいまらりそくそくあひりあひりあひり  
屏風のあよ

<sup>七信上</sup>あひりあひりあひりあひりあひりあひりあひり

みつね

<sup>七信</sup>あひりあひりあひりあひりあひりあひりあひり  
憲義ら海流よとあひりあひりあひりあひり  
あつあつ水と秋月とあひりあひりあひりあひり

たふ将済時

みづえいこに... 流るる水

大浦文時

<sup>菅下</sup>水の都は月が流るる水とて... 除目のあはる命婦

もいよき

<sup>菅</sup>年こふまゝお流るる水

回轉院御時以屏風

てとてまゝりりり

おまゝくお流るる水

持申納云教忠り

つきのゆるり

伊織

<sup>菅下</sup>なほは... 中務

中務

<sup>菅</sup>あつらふ... 有

歌しり

つゆき

<sup>菅</sup>おれら... 結

延享三年

流るる水

大學寺

とよむり

右門待ら

そまきの縁をさしていづく成程とて若くは流れてきたる

新しう答 夕佳下  
みつね

おほなるよとありぬれく守吹風のそとを風をありて

野宮よ斎規子なる申しゆるる母松風を琴とよ

影をよとゆるけり 斎宮女侍

このお母の峰の松風がふらふらと重なるなりありて

松風のそとにほゆるるまの好まじきなほのそとにほ

天曆御時名あり所とて四屏風よとせはく人く

あふとさつとせたまひく路母なる所こと

忠見

夕月  
たのむら松のこすお打あしき浪のそとを風よとよ

延載御時河原風

いづか

夕月  
あつと吹松風きこしきし海のそとにほゆるる

あまの四時大井よは幸ありて人くゆるるまを

ゆるるよ

夕佳上  
大井のそとの松よまるとしうらむとありて昔も

任者よらゆつとては時茶ゆるる人あつと

あつとつとよとゆるる

まことしきつと渡つる任者の松ありてせはくまことし

五葉の肉竹のこしれ賀の屏風よ和のうみおひさ

ちかあを

伊勢

ち下

海よのしらうろねのうみなららうみおひさ

物しりらる人おあつらうろねとこおひさ

しよのこいよーるあ

うーる

わろこら浪しよおあつらうろねよとせ人のあ

影しらあ

よみんあ

かおしよねあつらうろねのあつらうろねのあ

あしよのあつらうろねのあつらうろねのあ

うーる

いそねあつらうろねのあつらうろねのあ

河原院の右ねとーみのあ

源道濟

いそあつらうろねのあつらうろねのあ

影しらあ

よみんあ

在中と信者とーあねのあつらうろねのあ

いそあつらうろねのあつらうろねのあ

のろりわくあつらうろねのあ

いそあ

少佳下

いづる舟より地を高納きねね我もや安しき心  
あしこのうらみならぬ舟よわらしてさうらうらふ

源為憲

少佳下

世にこのふあつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら  
影しす

尚

えらり舟今そあつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら  
うらあしき心よみぬふとわらわらふ心よみぬふと  
守りよまらりつら眺よいくらゝのあつた心よみぬふと

た大将路時

少佳下

あさりもあつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら  
あつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら

天曆御時は屏風のあつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら  
のこ我よりとさうら

藤原忠実

七句

あつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら  
大いなる松あり浪とのこ我よりとさうら  
つとむりあつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら

よ丸人あつた浦

少佳下

あつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら  
あつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら  
あつた浦の松あり浪とのこ我よりとさうら

少高  
竹の葉は風に揺れおぼろげな光を散らす  
しほりけの山をゆく

歌  
しほりけの山をゆく

年<sup>高</sup>月を昔ふおもはせ成ゆえに  
しほりけの山をゆく

清徳と月林と  
しほりけの山をゆく

よみゆかり  
藤原淑生

若口村の桂のういまり  
しほりけの山をゆく

菅原の久保うらり  
しほりけの山をゆく

少高  
久々の月を桂もたけ  
しほりけの山をゆく

影  
しほりけの山をゆく

万  
月夜よ衣のしほりけの山をゆく

ちとせの月を桂もたけ  
しほりけの山をゆく

万  
久々の月を桂もたけ  
しほりけの山をゆく

白浪と月を桂もたけ  
しほりけの山をゆく

えり  
しほりけの山をゆく

万  
松を桂もたけ  
しほりけの山をゆく

なる  
しほりけの山をゆく

贈太政大臣<sup>管</sup>

あまけの道よ  
しほりけの山をゆく

うらり  
しほりけの山をゆく

われも  
しほりけの山をゆく

しるしをくみしつしるしつらふかしのあしをけりて

平宣文

こ文妹女古不更死

うきよかおししりしりさかきぬあつうさきよしてそふ

中宮各根うらの四屏風

伴鋳

木をたすむねのくさうすのくさうすのくさうすのくさうす

六津の文女あふしつらふかしのあしをけりて

くまのり

けらあふしつらふかしのあしをけりて

たけをたすむねのくさうすのくさうすのくさうすのくさうす

ゆるろのせうふをたすむねのくさうすのくさうすのくさうす

よの

暁の輝にあふしつらふかしのあしをけりて

あふしつらふかしのあしをけりて

あふしつらふかしのあしをけりて

あふしつらふかしのあしをけりて

あふしつらふかしのあしをけりて

あふしつらふかしのあしをけりて

あふしつらふかしのあしをけりて

あふしつらふかしのあしをけりて



まきの胡は乃書肥前りよまてしつてたか  
 にまろしとまかた岸とめりりやうりよまてしつてたか  
 詠文 人まろ

万 万  
 万の海雲を海ら月舟皇を林のまらりつて  
 心をよめる  
 万 万  
 万の海雲を海ら月舟皇を林のまらりつて  
 心をよめる

万 万  
 万の海雲を海ら月舟皇を林のまらりつて  
 心をよめる  
 詠葉

万  
 万の海雲を海ら月舟皇を林のまらりつて  
 心をよめる  
 詠葉

万  
 万の海雲を海ら月舟皇を林のまらりつて  
 心をよめる  
 詠葉

万  
 万の海雲を海ら月舟皇を林のまらりつて  
 心をよめる  
 詠葉

御製

田事<sup>ヤ佳</sup>たりといふたのすがたこそうたれまきとてつて  
 天曆十一年九月十六日  
 天曆十一年九月十六日  
 天曆十一年九月十六日  
 天曆十一年九月十六日  
 天曆十一年九月十六日

親子 天延三年 万寿二年 万寿三年 万寿四年 万寿五年 万寿六年 万寿七年

藤子 式部卿重明女

いよいよいよいよ

齋宮女御

<sup>ササ</sup>中よすいふこころはすかむ昔の今よきなりくあふん  
あすの女まをたむ時なりよなり

人まら

何ぞはあはれこころせむまをさるおこむむ  
小條大<sup>ササ</sup>臣まらるれしつらる家よゆけははるの  
みれゆらりよまらる

小野宮大政大臣

<sup>ササ</sup>なまをたむくありありあはれおのまらるふいよつは  
は

お大臣のつらこころのお大<sup>ササ</sup>臣のいよなりしつら

はのこころはあはれをたむれ

愛宮

九条右府中女母国高元  
三子死す後西宮大<sup>ササ</sup>臣の

年よてたらのこころあはれつらるあはれ  
大戴<sup>ササ</sup>印章こころのたむけりゆるけつらる  
をいつけりなりたれ

あはれ

あはれの母草こころ有やまのあはれ  
あはれ

うてたむのあはれをたむけりなりたれ

中務

わびりてまろく元ゆるりよと京よりくさるるいふこと  
せしゆるれど 中きりこころいかに

病のちりたりこまにあすきと又たてをこぼるる

神明寺の邊よ今常前よりまをゆるりこころ

ろくゆるれい せしすあ

<sup>下</sup>わいぬのりやゆゆのいぬんとくらねえこのこと

二條右大臣左近衛長作伯清忠よりしてこころ

ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

よそよそゆるり

<sup>下</sup>浪の波の流るるよとていふこといふこといふこと

かいてゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

とて こころいかに

うきうきいふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこといふこと

かきとるまを事い

源景明

<sup>下</sup>つむいこころいふこといふこといふこといふこと

影いすよみこころいかに

中きりあはぬこといふこといふこといふこと

中きりあはぬこといふこといふこといふこと

おとこの侍より女よきりし  
しつとてきか

ふん

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

拾遺和歌集卷第九

雑下

ありとあらは春秋につ連りて  
よ

紀貫之

<sup>が下</sup>云秋よ思ひて人よ  
元良のみよ水香敷のう  
といゆれは秋よ  
あまの秋よ

影しらす

よみん

春つて花のひふはく許物のあはれは秋をまされる  
回轉院うらうらひすなはとさすといふ連うら  
はつと申せしおぼえし連うら

大細言別文

折らにいでしとみねの神しうらうらみねの  
こつねこみ神よといひたり

系議併衡

<sup>少下</sup>白癩ふらとみねの神しうらうらみねの

こつねこみ神よといひたり

<sup>少下</sup>白癩ふらとみねの神しうらうらみねの

系議併衡

<sup>少下</sup>白癩ふらとみねの神しうらうらみねの

こつねこみ神よといひたり

春つて花のひふはく許物のあはれは秋をまされる

回轉院うらうらひすなはとさすといふ連うら

はつと申せしおぼえし連うら

折らにいでしとみねの神しうらうらみねの

こつねこみ神よといひたり

白癩ふらとみねの神しうらうらみねの

系議併衡

昔より一巻の事なれど我ら今も  
又さ

いふ事なれど我ら今も  
いふ事

いふ事なれど我ら今も  
又さ  
伊衛

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
みつね

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
草合一巻の事なり

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
よみ人

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
集あり

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
草合一巻の事なり

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
いふ事

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
いふ事

いふ事なれど我ら今も  
いふ事  
いふ事

少

少

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる  
健守は神代名の一舟也と云らるる  
くねうしつつけくね

源経房朝臣

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる  
か  
あ

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる  
屏風よは障子舟よはりてこころいじむらわらふ  
あ

右大臣道總母

<sup>女佳下</sup>わら海あまの舟をあらうとてこころいじむらわらふ

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる  
あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる  
あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる  
あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

<sup>女佳上</sup>あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

あはれまはしのこころいじむらわらふまはまはる

あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりてふりて  
かひのうらうらとてむらかおとこらとてむらとてむらとて  
そいとうくかてきこひををせむられ

伴娘

れく次とてあひまこいほのあややあしれれ  
能宣は車ありめとこいよつとてむらよ  
すとひくゆたれ

藤原仲文

<sup>カ雀下</sup>あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて

あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて

<sup>カ雀</sup>あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて

廣義はあひまふりてふりてふりて

けのむらにんかあひまふりてふりて  
惠慶は師

<sup>カ雀下</sup>あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて  
あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて

伴娘

能宣はあひまふりてふりてふりて  
あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて

あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて

あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて

あしあしにむらにんかあひまふりてふりてふりて







田約馬の家よ右大御言資のつとて小御を討つに  
らりよまらたりけし道にあらぬとていふ事あり  
しと約馬を討つ事 小御言大政大臣

<sup>少</sup>流しとあまをたれとはま千鳥路ありしとあまの  
か

<sup>昔</sup>あまをいあまうけし人濱をたつたあまの海に  
か

みよりこれけ許をらるるらむらふあまの  
清原元輔肥後も約馬討つてのらあつての  
あまの所よりかよまらりすらけか母にむらなる

法師ありよ人のつら

なまよきつてつとていれよらるる事つてつとていれありあは有  
三位圓章ちらひとていれよらるる事つてつとていれありあは有  
つねのりあまをせて大御言約馬の兵衛佐よつら  
時つとていれよらるる事

あまのつとていれよらるる事つとていれありあは有  
か

あまのつとていれよらるる事つとていれありあは有  
あまのつとていれよらるる事つとていれありあは有  
あまのつとていれよらるる事つとていれありあは有

加藤

少佳下

かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
宣義と家よりかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには

藤原為頼

高

かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには

藤原為頼

高

かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには

高

かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには

高

かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには

旋頭歌

かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには  
かたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちにはかたがひのちには





うらつて ひとしきく せむし

ぬい ー ー

せ中を ながさく ひとり ー

すれしれ ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

あつめ ちうしん ちうしん ー

人みみよ ちうしん ちうしん ー

きみしん ちうしん ちうしん ー

あつめ ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

ちうしん ちうしん ちうしん ー

我しあき

あつめ ちうしん ちうしん ー





身とあして 花の華ハ ひとくも わりに 花は  
吹風の あらき方まあてて せしむるを  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

康保元年七月 中宮女子崩 同日四年九月 村之崩

康保元年九月 立坊安和二年二月 七日 中御下 益着信を蔵人 乃若元

元弘三年 中御

安和二年八月 十三日 淡祚九月 廿三日 即位叙三位 攝政

淡祚日太政大臣 實賴 攝政 天保元年 九月 攝政 薨 右大臣 左大臣 伊予 攝政

天保元年 三年

天保三年 十月 攝政 太政大臣 薨 下時 大納言 右大臣 大納言

十月 廿七日 中御下 益着 信乃 太政大臣 内侍 天保二年 太政大臣 關白

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて  
あせまらう ちりしすしと みりきて

あうせの ちかみりを けらるる きておすの  
すきむらよ せいふたろ 枝にあし 大原野を  
つらふま けきをうめ物なは てるけと  
ふてとも 年のとらよきよあすた けちをつねよ  
からぬき にはいれき 春くとも けとやを  
年乃田母 春吹風し であは となのおと  
こけとありあし

この水也くいふおめとたけきし進たの  
又水也

おぼせむらぶくさふいふ舟のさし許のへありす

天元<sup>貞元三年</sup>六月廿日初泰内八月詮子八日十月カ女

天元<sup>貞元三年</sup>十月二日右大臣即日遣二位元二年三月二位三年育日

皇子誕生

永観二年八月五弟一皇子懐仁親王カ皇太子

寛和二年六月廿三日太子踐祚攝政七月遣一位准三宮列三云上

永祚元年冬改大正二年九月出家七月薨六十二



少佳

あふさうらけの秋のあはれをいかにいへば住者の私

忠度は卿

少

我々の秋の事とていふも昔よりあつた事なり

人いふに秋はかたし

いそよりの秋はいかにいへば秋のあはれをいかにいへば

源遠古朝臣の秋の事とていふも昔よりあつた事なり

いそよす

秋の事とていふも昔よりあつた事なり

いそよす

信都實日

秋の事とていふも昔よりあつた事なり

恒徳の家障子

秋の事とていふも昔よりあつた事なり

栗田右大臣家の障子

所あはれいかにいへば

秋の事とていふも昔よりあつた事なり

秋の事とていふも昔よりあつた事なり

秋の事とていふも昔よりあつた事なり

秋の事とていふも昔よりあつた事なり

安和元年大骨言風俗



うらなひのしるしありし世に  
天禄元年大貴なる風俗千世傳山

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

中務

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

うらなひ

うらなひのしるしありし世に

延長元年八月廿日民部卿清貫の六十賀申納  
言恒作書一信々々時乃屏風よろこぶ所の  
うら  
わしきのふらけのまはかろかけいさあゆみ祿のまは  
すむひとよきゆかり

人まゐ

たぢのじりすく<sup>廿五祿</sup>ま祿のつとねり 妹背山とるるをうけき  
延長元年亭子段のうらとりお御幸ゆかりふらあ  
官廿一有るよみくそとらうけりよ

藤原忠房

延長二年八月廿  
廿年八月廿

あつちまづらぬうらうらぬとあゆみ祿のつとねり

拾遺和歌集卷第十一

恋一

天曆卅時奇合

壬生忠見

かじ  
ふしをうの者まをたまよけり人し思すこえ思をり

平惠威

志の道とみよとせむらの口の恋は地やなす人の心と

影のうす

貴之

後撰

いふたうふうつ方許とやせし思心と後撰のうすし方人かた

女のりいといちてははけしき

平ら誠

おれ方に非ゆかぬおれと今行ふおよむてむ

影のうす

うす人あふ

サレ

おまはあしつめよふをいそぬまいぬと人のあふを

サレ

おれとちよと年のぬるあははるはよわぬ人の

おれとちよと年のぬるあははるはよわぬ人の

人麿

おまの心雲うしなふ神のをとふのまきく渡りき

よき人

おれ人の心よきあそおつる非とあふ人ゆよ

夢をりとあふ人をみよあつる今あふする人あふ

おれ人の心よきあそおつる非とあふ人ゆよ

万

よき人の心よきあそおつる非とあふ人ゆよ

おれ人の心よきあそおつる非とあふ人ゆよ

付

於中細言教忠



身う一か息の年やまてしつゝはあまのいへぬしあは  
ゆほよゆくり時女よちりてしつゝりり

くわあわわ

いそりあまをまじり来人一とと息のうらめい

権中納言教忠

後撰

何そらんか思て事とまじりつてあそきまよき

しつみの中納言のみや<sup>梶子傳正</sup>明教を母

小野宮大臣

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あま

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あま

あま

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あま

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

あまのうらめいよちりあまのうらめいよちり

せすゆくれ

<sup>セ</sup>あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

新しらす

<sup>セ</sup>あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

<sup>セ</sup>あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

いふあはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

いふあはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

九條右大臣 季平 作者

後撰

後撰

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

よみ人 季平

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

あはれにまのしるしをばりて我が心のまじりて

らそわのこも人ちもあつたのたのたのた  
大原野系乃日あつたよあつた女が許あつたよ

一 條 樽 政

おあつたの神にちうんわつたよあつたあつたあつた  
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あ

人 ま り

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あ

寛 祐 け 祐 ち 忠 朝 臣 子

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あ



新しう書

人し道原ある波のしりぬるのよきとて袖をらぬ  
おとこはたけりぬいを思ふあはれしつらきとて人ぬき

天馬御時哥合よ 中納言朝忠

あまのときをうたふ中りぬあはれとて悪しき

影さしぬ かねそら

逢半はくぬのすりかきりぬる月とありしやう

よこしぬ

あまの月をよみてお射はくしぬあはれぬとて思

ひふをうらむとて思ふしつらぬはくおとく

あまの月をよみてお射はくしぬあはれぬとて思  
ひふをうらむとて思ふしつらぬはくおとく

しつらぬ

あまの月をよみてお射はくしぬあはれぬとて思

ひふをうらむ

あまの月をよみてお射はくしぬあはれぬとて思

大伴百世

あまの月をよみてお射はくしぬあはれぬとて思  
ひふをうらむとて思ふしつらぬはくおとく

源経基

あまの月をよみてお射はくしぬあはれぬとて思

ひふをうらむとて思ふしつらぬはくおとく

ゆき

よこし

人さすもあはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも

あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも

菅原捕照

あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも

あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも

あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも

あはれ

あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも  
あはれよかこもはらひらくまじきあはれよかこも

拾遺和歌集卷第十二

戀二

新しうき

よき人しうき

春の野はたけちなまきあひしりまをきりてふくむかぬ  
おききよきうつくしおきあつらふらん人しうきおき

人麿

おきよきうつくしおきあつらふらん人しうきおき

よき人しうき

たけちなまきあひしりまをきりてふくむかぬ

よき人しうき

竹の葉にしよきあつらふらん人しうきおき

よき人しうき

あつらふらん人しうきおき

唐衣我におきあつらふらん人しうきおき

源重久

たけちなまきあひしりまをきりてふくむかぬ

よき人しうき

おきよきうつくしおきあつらふらん人しうきおき

女もよきうつくしおきあつらふらん人しうきおき

藤原忠房朝臣

後接

あつ名乃まよとらむは身ありせし和がよそ人あつてまよ  
部うらす

夢うしと思ふはしむ福やまきりむせむわつたれこたひ  
持ちよめにひらき人あつてあつてつらひにひらき

於中納言教忠

サレ

あひてつらひにむらむむらむ昔もあつたはしつらひ

故上是別

後接

あひて思ふはしむ福やまきりむせむわつたれこたひ  
よそ人うらす

サレ

あつ名乃まよとらむは身ありせし和がよそ人あつてまよ

サレ

あつ名乃まよとらむは身ありせし和がよそ人あつてまよ

よそ人うらす

故上是別

サレ

あつ名乃まよとらむは身ありせし和がよそ人あつてまよ

故上是別

後接

あつ名乃まよとらむは身ありせし和がよそ人あつてまよ

故上是別

百

あつ名乃まよとらむは身ありせし和がよそ人あつてまよ

故上是別



後

いとろしむ時なきわらわの好まぬあふまわひらり  
葛葉我やんあつとつらあきせしほとつ物とてたけ  
平次乃女の志れ許せばしめてぬりてあしよ

平次時

あさきとれおとけきつる衣も此ひつまほりふあつとつ  
平次乃いじりあつとつあきまよりかろひあつとつ

大納言源きよとつ

あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ  
あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ

サト

あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ  
あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ

あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ  
あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ

あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ

サト

あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ  
あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ

サト

あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ  
あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ

サト

あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ  
あつとつあつとつあつとつあつとつあつとつあつとつ

在原業平朝臣

あつとつあつとつ

かたも有る物もあはれむにこそはなれどおの

女よつらうら

うら

<sup>サト</sup>あはれむにこそはなれどおの

うら

<sup>サト</sup>あはれむにこそはなれどおの

<sup>サト</sup>あはれむにこそはなれどおの

<sup>サト</sup>あはれむにこそはなれどおの

<sup>サト</sup>あはれむにこそはなれどおの

天曆御時方合よ

<sup>サト</sup>あはれむにこそはなれどおの

うら

<sup>サト</sup>あはれむにこそはなれどおの

女よつらうら

あはれむにこそはなれどおの

源五忠朝臣は

ありつらうら

うら

あはれむにこそはなれどおの

影うら

うら

あはれむにこそはなれどおの

あつたはなりのうらみもなほあつた  
あつたはなりのうらみもなほあつた

大徳院のうらみ

いさよのうらみもなほあつた  
いさよのうらみもなほあつた

あつたはなりのうらみもなほあつた  
あつたはなりのうらみもなほあつた

よこすけ

<sup>少佳</sup>あつたはなりのうらみもなほあつた  
あつたはなりのうらみもなほあつた

あつたはなりのうらみもなほあつた

よこすけ

<sup>百</sup>あつたはなりのうらみもなほあつた

あつたはなりのうらみもなほあつた

<sup>百</sup>あつたはなりのうらみもなほあつた

よこすけ

あつたはなりのうらみもなほあつた

あつたはなりのうらみもなほあつた

<sup>サト</sup>あつたはなりのうらみもなほあつた

あつたはなりのうらみもなほあつた

とよよ

<sup>サト</sup> 春の日はあけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
新らす

よこしあさ

<sup>サト</sup> 風さしを寝るるりあはしけし物思ふもよもいそ  
<sup>サト</sup> 一のあまのつり中もせらふもあめはよもいそ  
<sup>サト</sup> 春のあけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
<sup>サト</sup> 春のあけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
きあけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
あけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
あけぬ流るるよと物思ふもよもいそ

ゆれ

ゆれ

<sup>サト</sup> あけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
新らす

人唐

あけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
万葉集和

ゆれ

源順

<sup>サト</sup> あけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
侍はゆれり時  
てあけぬ流るるよと物思ふもよもいそ  
すゆれ

一條棟政

かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

影しらす  
よこ人しらす

我さうしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

ありしほしんや、しほとくしんや、

よこ人しらす

あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

影しらす  
よこ人しらす

つゆふ人の事、あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

美本初長

人あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

影しらす  
大伴方見

あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

よこ人しらす

口をばし、あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

五月廿日あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

よこ人しらす

あつしほしんや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、かたしおのりや、しほとくしんや、

少上

少上  
後様

少上

少上

新しう書

みつね

<sup>サレ</sup>新しう書きたるは

かやう大いなる

うらやま

かやう大いなる思ふ人志は

影しらす

勝記は神

ふ忠朝日

<sup>サレ</sup>この書は

ふしん

<sup>サレ</sup>思ひは

<sup>サレ</sup>かやう大いなる

<sup>サレ</sup>かやう大いなる

新しう書きたるは

<sup>サレ</sup>今更よき

新しう書きたるは

拾遺和歌集卷第十三

恋三

新しらす

よみ人あはれ

あはれきのうらむ風はこころをよほす

人まら

華引の山をたのむるはこころをよほす

こころあはれ

あはれきのうらむ風はこころをよほす

あはれきのうらむ風はこころをよほす

あはれきのうらむ風はこころをよほす

石上し磨

たは磨男

あはれきのうらむ風はこころをよほす

新しらす

あはれきのうらむ風はこころをよほす

あはれきのうらむ風はこころをよほす

よみ人あはれ

あはれきのうらむ風はこころをよほす

人まら

あはれきのうらむ風はこころをよほす

日輪院御対行屏風八月十六日秋月のあはれ

うしよる家よあまの女をけけりしる時

平徳盛

秋の朝月乃るよはにたきぬつ今朝もねてや我はこころ  
月あつてはる朝女も許よつこころもきり

源とねあきら

<sup>サト</sup>しりしははあまの女あまのこころ今朝の月よあまの  
あ

中務

<sup>サト</sup>あまのこころの月よ我はこころあまのこころ  
あ

久月あまの月よあまのこころあまのこころ

京よ思ふ人よあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

<sup>サト</sup>あまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

<sup>サト</sup>あまのこころあまのこころあまのこころ  
月よあまのこころあまのこころあまのこころ

中宮内侍馬

<sup>サト</sup>今朝あまのこころあまのこころあまのこころ  
あまのこころあまのこころあまのこころ

月よあまのこころあまのこころあまのこころ





万 何うしてよとて思ふに春はあけぬとて思ふに  
万 春はあけぬとて思ふに春はあけぬとて思ふに  
万 春はあけぬとて思ふに春はあけぬとて思ふに  
万 春はあけぬとて思ふに春はあけぬとて思ふに  
万 春はあけぬとて思ふに春はあけぬとて思ふに  
万 春はあけぬとて思ふに春はあけぬとて思ふに  
万 春はあけぬとて思ふに春はあけぬとて思ふに

ふかきとてそりとの思ふに今春あけぬとて思ふに

遠き千々本屏風文

さしあけ

こぼくろ時ふみられ春の田とて思ふに人をさしあけ

題をらす

あはれとて思ふに春はあけぬとて思ふに

まつね

あはれとて思ふに春はあけぬとて思ふに

よこ人

春はあけぬとて思ふに春はあけぬとて思ふに

あはれとて思ふに春はあけぬとて思ふに

あはれとて思ふに春はあけぬとて思ふに

あはれとて思ふに春はあけぬとて思ふに



ひらひらとちりちりよ

御製

山つらみきたよちちりちりよこよ思ふもぬみもぬみ

廣義の家乃障子の思ふもぬみこちちりちり家をも

かきけりて

清原元輔

思ふ人ぬきもぬみちちりちりよこよ思ふもぬみ

歌うす

よこ人ちり

秋の野の紅葉しとけぬつゆつゆけのみちりちり

三百二十首あり

曾孫ぬ忠

てかひのちちちちちちちちちちちちちちちちちち

歌うす

よこ人ちり

うらみちちちちちちちちちちちちちちちちちち

人まり

秋の田んぼのちちちちちちちちちちちちちちちちち

何者のちちちちちちちちちちちちちちちちちち

お人

こひくちちちちちちちちちちちちちちちちちち

中納めちちちちちちちちちちちちちちちちちち

廣平親王

天曆才一母祐作元方  
天禄二薨廿二  
御女

秋をあらしむ風人すむわらわらしく人かたむけりてあまき

野々々

よこし次

あめゆくぬのの秋とき風よけをさうらうら物よそ思

中宮内侍馬

うらぐらうにえ許しあつたあやそと秋よありあけかる

女乃許よつらうきり うらぶ

半の葉し霜よあそしなかりあ秋うらうらうきり

はるゆき

あめあまきと人あそらうらうらうらわらわらあめい

あめあまきと人あそらうらうらうらわらわらあめい

うすあめあまきとらうらうらあめあまきあめい

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

人麿

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

源景明

あめあまきとらうらうらあめあまきあめい

影しす

人麿

ガレ  
子らあつこい事あましし成程とまうこい思ふとまう  
コト  
コト

拾遺和歌集卷第十

恋

贈しらす

人麿

少上  
あまはつこ我しけつううううきんめと抱れし物を  
元補つじこいあつてあしらす

藤原實方朝臣

影しらす

人麿

あまはつこ心なつにけり物をいそとくうき方ちらうじ  
あまはつこあつらうきつう今もあまの心なりあつとあま  
一条棹改内よそいひんあつとあつてあまの心なり

人よむに可もてもらゆる女をうてにけりなれど

小戴命婦

あしそとふまをくまひ川に流れしをいふとていふはゆり

影の深 人まら

万 <sup>少上</sup> 女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

万 けりけり中にいふる結松のいふとていふ人あは

万 女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

わがてはいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

万 浪まらり女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

万 女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

万 女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

人まら

いふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

万 女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

後撰 女をいふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

藤原忠房朝臣

いふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

人まら

いふらり葉のききと母のうらうらとていふ人あふらる

限りく思ひあはるの橋柱つたよりよ申やとてん

女のせしめはけりうしきり

源頼光

申くよしよとてあはれなるのねらひのけり

あはれ

よとてん

すきとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

源頼光

サお季鏡女

わらわのあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれ

實方朝臣

何せんよ命とてあはれなるのねらひのけり

あはれ

よとてん

あはれとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれ

よとてん

あはれとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれとてあはれとてあはれなるのねらひのけり

あはれ

よとてん



涙のしほりなほくさくさ南のつらみの波よそ

しほりなほ

波のしほりなほくさくさ南のつらみの波よそ

万葉集和のりなほ

源光の母

<sup>サト</sup>みづうはういみづのつらみのつらみのつらみのつらみ

女のももふつらつら

藤原惟成

<sup>サト</sup>人よすおつら波のつらみのつらみのつらみのつらみ

天曆御時水香殿のまことつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつら

齋宮女御

かきみつれおまれば水のつらみのつらみのつらみのつらみ

歌一す

よみ人一す

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

波のつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

いおのあつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

津のつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

<sup>サト</sup>つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

さびしきおもはれはひらきわたるまはりのこころをいかにしる

人まじり

万  
おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

よこし人あはれ

少後上  
むねのすめをいかにしるまはりのこころをいかにしる

少下  
おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

屏風よみこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

かななり

少下  
おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

つとす

天曆御製

世のふかきおもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

影のこころ

よこし人あはれ

おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

少下  
おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

人まじり

おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

よこし人あはれ

おもひのこころをいかにしるまはりのこころをいかにしる

ら



<sup>サ上</sup> 雲井なる人よ 遠くはるかよのくに くらげのこゝろ ぞもて 雲井を  
みらば まつりてよみゆかり

いしきり

<sup>サ上</sup> 我よ有てふおのぢ 足もつたふの 家より早くよの ちのちのち  
影す

かた人さ

わつらつらわらつら ことあはれ 公孫のすゝもいふの けいめを  
入道招致まうり けりけりよかたをねんく ありきりして  
うらまへにぬく 元道てゆめれを

右大持道徳母

<sup>サ上</sup> 秋つ 鶴ぬりよ ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは

鶴ぬりよ

かた人さ

あけ本なる人つら ぶらぶら ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは  
よのちのちのち ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは  
ぬきつは ぬきつは

<sup>サ上</sup> 人ぬつたよのちのちのちのち ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは  
くまのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは ぬきつは

影す

かた人さ

<sup>サ下</sup> 雲井なる人よ 遠くはるかよのくに くらげのこゝろ ぞもて 雲井を  
みらば まつりてよみゆかり



拾遺和歌集卷第十五

戀五

善祐は神みことれゆる母なりとてさへ

<sup>サト</sup>なほ世にれ海よりちるひたあゝめを流るる

歌らす

人まら

<sup>カ</sup>信若の岸よむらうあふら流あふたをよふぬにたあ

か

<sup>サト</sup>すてふとていりあふ今にたをよふたをよふたをよふ

<sup>サト</sup>まゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふ

りいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふ

<sup>サト</sup>ら方よあふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ

<sup>サト</sup>有むいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ

<sup>サト</sup>いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふ

<sup>サト</sup>せ中のいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ

<sup>サト</sup>いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふ

人まら

<sup>カ</sup>戀はあふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ

<sup>カ</sup>いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふ

<sup>カ</sup>いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふ

重八

無一物にたもつてわづらひて思ふに花見もまじし物と

読人しす

さしつかへなくもあはれむにたがひたあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

女よけりてさしつかへなく 人中臣能言

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

あはれむにあはれむにあはれむにあはれむに

藤原有時

たふゆたむ恒譽

<sup>サト</sup>あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

しんゆまの

<sup>サト</sup>あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

人まら

あふちかたのころわらほきくはきくはきくはきくはきくは

万 意儀のちゆく海うけは我したるもくはくはくはくは

万 ちかたのちあふちかたのちあふちかたのちあふちかたのち

<sup>サト</sup>あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

しんゆまの

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

しんゆまの

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

源京時

<sup>サト</sup>あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも

しんゆまの

あふこのちをきけはる本とくはむ道にいさるねりたはらふも





新考教中絶言

人ともあつたに過ぎぬのその若くはねむる有る

弊りす 云々人云々

限りし身かきりて一紙の人とあつて我々の心ありた  
ありて海内浦とありて我が海内を分るべし  
つれづれと人云ひとすといふて悪くもなきをうけり  
悪むしうてうてくをたもあつたにけしめられたるは  
<sup>サト</sup>近江の打出のくまのうらてつて悪くもなき一紙をうけり  
<sup>サト</sup>海内ありたにけしめられたるはありてあり有る  
<sup>サト</sup>かきりぬ身かきりて南思ひしは悪くもなき一紙

<sup>サト</sup>悪くもなき人云ひつてくまのうらてつて悪くもなき一  
紙ありたにけしめられたるはありてあり有る

閑院大君

<sup>サト</sup>悪くもなき人云ひつてくまのうらてつて悪くもなき一  
紙ありたにけしめられたるはありてあり有る

あつたにけしめられたるはありてあり有る  
いへばいへばある事なほありてあり有る  
かくかくいへばありてあり有る

人云ひ

た大臣女述子 清原云々にせゆもれはちたあひまひ

天曆御歌

ふくよかのあはれと思ふもあはれとあはれとあはれ

女の許よりうきなり 平忠信

<sup>サト</sup>逢事、心よめそやふもよめとあはれとあはれ

影うらさ うき人

<sup>サト</sup>わさりのうきと秋も忘南人あはれとあはれとあはれ

早道のあはれ、あはれとあはれとあはれとあはれ

<sup>チウ</sup>我許我をたもと人あはれとあはれとあはれ

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ

にり事かすこり神のこころあはれとあはれとあはれ

こころ前よゆり人あはれとあはれとあはれ

とこいこいさうりてさうりこいさうり

高砂よわりのこころあはれとあはれとあはれ

影うらさ

かきまのこころあはれとあはれとあはれ

拾遺和歌集卷第十六

雜春

歌々次

凡河内躬恒

春立と思心きう候しくして今うとせられたる

よと人あつ次

わくしき年ふわとていふら毎口方のと我ちりし

阿しき来年ふあましとて愛あなまぬまふうらうら

小宮屏風よ

右を

年月のゆゑのしぬらふたなつたもや春とて

延和十六年春院屏風より

紀貫之

春をたぬらうといふあはれむじふも折あやな

正月よんくさうてきさるらりよ又のあしな

右巻の持石仁朝臣よりしふつりり

中務卿具平親王

あつさりし春よほひのさしよ梅花よそけと折つ

たふされゆらう時家乃びちの花とてゆて

贈太政大臣 菅

らあはゆいなきせよ梅をあしあし春とて

そりりの毎院乃屏風より

ふと人しつ次

梅花春のしつあきよきとてけりしとてかかふまれば若のあつ

影しらす

中納言安倍廣庭

少春万

うし年ねててうしつやのわが木も梅の花をばなかり  
矢替時大いし所なりしうらひのすばらさ  
枝よつきてとてとてとてとて

一條栲政

花のあきあすもも雪はねくの枝よすめあきとて  
木もしつ梅花のともふ所併してをばねて花宴を  
ゆせ給ふ敏とるをのこももももももももももももももも

少佳

源寛信朝臣

折てかたもいもあつ小梅花もさうのれもあつとあつて  
用意の所遊ゆりつ時

糸織伊衡

少佳

かうしてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
清和の七つみこ六十賀の屏風よ

つとゆ

かきとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
影しらす

年とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

日輪院御時 三六 御屏風十二帖之中

海をくま

栴檀の香はよき人ありてのありては  
お白河の山庄は花のありては  
お人くまうしきあらはれ

右末門書るに

<sup>ナ佳上</sup>春のきそ人といふるは  
くまうしきあらはれ  
安はく

おつるるまのら道とて霞の中は

延喜十の御院屏風は

人あり

<sup>ナ佳上</sup>思事ありては

小糸の御衣は

一のふ

<sup>ナ佳上</sup>だう浦は霧の

はきおのひは

よめる

よみ人

おまはるるは  
おまはるるは

中宮内侍

<sup>少佐上</sup>かすねのたまはるるをきけりあはるるもたぬあはるるをきけりあはるる  
女もたぬあはるるをきけりあはるるもたぬあはるるをきけりあはるる

藤原長能

<sup>少佐上</sup>君よすまかきねはつちのわらわのたまはるるをきけりあはるる  
東三條院四日十九日あはるるに子日いそぎあはるる  
まの表といはるる人の許あはるる

右衛門侍公

それよらねともいひん家のあはるるをきけりあはるる

子日

忠孝は師

いまそかろ子日のねらひをきけりあはるる

影さす

よこし

あはるるをきけりあはるるをきけりあはるる

齋院子日

あはるる

むしらのねらひをきけりあはるる

右大将言資下藤よのろけ子日

清原元棟

たの母よあはるるをきけりあはるる  
正月叙位あはるる所よ人くまらあはるる  
よこしといはるるあはるる

大中臣修宣

<sup>少佐上</sup> 杉なる引人を有する神の纏りうひまらりなる  
降目のえり子日あらりてゆかり母杉密更衣たふ  
つかねる杉とけりそすくぬのをさうしてゆかりよ

とすき

引人しめそむめつみりへの杉子日とよれふこをさけ  
康和二年まま文部人よありて月めうりに民部を  
うつてもさむをうらひよめて右を命めつかに  
はかりりたる

ひくもあしとあしあつちあ今そつたあひのりわーん

野々

よこしん

はげしむれよりみりもこの花らまて杉を思ふりぬる  
肺のみこ人く母こよまさせゆかりよ

り削嘉言

山さきの家のあまあはれたかきねる柳すあんとふらんゆ  
春めまよりなるふつたさうなくしてゆかり女もあ  
野へはゆかりとたてあふつたすあそこいあれたとこ  
ろあつ世とこいあれた

賀朝は師

<sup>少佐上</sup> たるのゆきありとじとよたのよきあね許みとらやき



やう

よき人

<sup>少佳上</sup>春のつゆあつたふれなかりけりゆは所をたぐひ

影ら流

かきらう一宵しつ南極花もさぬふもてをむ  
たるむせに花もさむもゆもさむもさむもさむもさむも

みつね

あつたむせにさう花もさむもさむもさむもさむも  
よき人

ついにさう花もさむもさむもさむもさむも  
延喜中時月次屏風

<sup>少佳上</sup>

あつね

あつたむせにさう花もさむもさむもさむもさむも  
さうの花もさむもさむもさむもさむも

あつたむせにさう花もさむもさむもさむもさむも  
さうの花もさむもさむもさむもさむも

<sup>少佳上</sup>

あつたむせにさう花もさむもさむもさむもさむも  
あつたむせにさう花もさむもさむもさむもさむも

云生忠見

あつたむせにさう花もさむもさむもさむもさむも

あつ人のまゝしにうつろひける

浄尊印淨哉

<sup>サ雀上</sup>霞立山のおまゝの楊を思ひてあつる風くささ

影しらす けしゆき

をらまればたしるつゝ白海のうらや我はけりや世

春花山は亭子は里たうゆとてく境はひ

たれは 信正編照

<sup>サ雀上</sup>まゝといふもさうさう花山はさうさうとあつておまねなる

<sup>源二程 雁子 幸改贈大政大臣女</sup>京極の息所すけみさうとゆるり時圓司のえま

くらりあまきしあけりけり中よ

藤原忠房朝臣

あつめづつの人あつすのけりあまきと花とく世かれ

あつとまはくといひつゝさう花とくそまはくぬさる

春霞がすりのくおまわりのあつてさうゆかみわこ人る

田舎院神守とて人の屏風よ花あまはるる人あ

まりのあつるお かねさる

あつまゝのあつた思ひら花たてさくゆかりをり

清信の家と池のなまらあつた花とさうゆか

あつとまはく

<sup>サ雀上</sup>あつたあつこあつたけさけさけあつたあつたあつたあつた

上 繼りのありてゆかりなる源頼光の家よりて  
人くまけさうへりはいてよ

藤原長隆

<sup>サ</sup>上  
あつらひ地の雪まよとひきてきたわかれ愛ふれをみか  
清信の家ありさうをよさうしあめりしにさうの親  
よつてさうしてゆかりなうさゆかり

為盛弟 字五

元のをよはさうありあふ家守にのうさうとあうと物息  
あつらひさう人あふ 平さうさね  
み山本のあひなうさうあふさうさうさうさうさうさうさうさう

いじくうりゆかり時よさうさうさうさうさうさうさうさう  
ゆかり 藤原長隆

かふよはさうさうのいかりあふさうさうさうさうさうさうさう  
石山さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
ゆかり

のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
教慶式ふのみさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
うちさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

しんさう

<sup>後</sup>採  
いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

近衛河内南殿よりうつそゆの春花とて

源公忠朝臣

<sup>廿七</sup>いふより此ののむつこふあふこの春の許あはれぬ  
影らさす

あふ花みつこのふれつきあはれぬ  
年よ春のあはれぬ

三月よりよ月ありける年よ山吹とよゆらる

菅原捕服

<sup>廿八</sup>春風のよき風よふりしかるねてあはれ山吹の花

浦のよみよあふよじまよ海の花をよあていふん

くらゆき

あふよ河風よとめ海の花をねらよゆらる

あふ子院京極のよあはれよわさせよあてゆき

いよそかくよあてくよあていふん

一條のきき

貞平親王女

大和池原御女房

こままりちりちり花とあつめいせよ  
おのほすすゆかりこころいせゆかり  
ゆかりもゆすしと梅の花のうかりゆかり  
えいゆかりきつこころいせ

如賢法師

<sup>サ催上</sup>春すきこころいせゆかり梅の花か許り枝よのこころ  
右末門持云ゆかりこころいせゆかり  
つりいせ

大入道

寛弘元年十月以後不出仕  
二年七月廿日上表辞申御言  
執殊加増二位即日仕

春のよきとさくらやとてはる雪はよきをせとさくらよき  
ゆかり  
ゆかり春よきとさくらよきとさくらよき  
四月朔日よきゆかり

春のよき

春のよきとさくらよきとさくらよき  
近き宮年九月廿六日は皇女御下賀京極のよき  
とさくらよきとさくらよきとさくらよき  
ゆかり

松風のあつめゆかりとさくらよきとさくらよき



廣義の家障子

かく許すところを部公にすくくをのびわらる

影しらす 大中臣棟親

<sup>サ催上</sup>あひまの山部公内とあはれてうそれし時よあはれは

坂上郎女よつづきを

大伴像見 カミ

<sup>サ催上</sup>ありそあはれし此をう部公事つてやうにうつきを

つらみはるる時 健守法師

終末のゆかりをうけしれは弟あはれは病れおさけり

延長七年十月五日のうのみこみ賀しゆら

時乃屏風 つらみ

こころの花をうけしはうららてすくく月日のうすしあ

一降掃政の北方のゆかりをうけし女にうけし時

贈皇右宮 懐子

うけしはうけしはうけしはうけしはうけしはうけしは

影しらす 躬恒

<sup>サ催上</sup>いふはねぬをうけしはうけしはうけしはうけしはうけしは

あはれ

拾遺和詩集卷第十七

雜秋

屏風よ七月七日 源をうふ

たゞよはれりあはれりしはかなのいさく許さつるこゝろを  
田舎院に屏風よするをいさくつりしうらわゆる  
きりあをいさくねたしこゝろなり

平魚盛

すまふあめ別しゆくきよとらふもあつるあつる  
七夕後期にうらわゆるをいさくつりしきり  
いさく

後撰

あまの河をいさくあまの河をいさくあまの河をいさく  
歌うす 人まら

わづらひもいさくあまの河をいさくあまの河をいさく  
すまふいさくつりしきりあまの河をいさく

天曆御製

御女のうらひよいさくあまの河をいさくあまの河をいさく  
歌うす 人まら

あまの河をいさくあまの河をいさくあまの河をいさく  
天禄元年九月廿一日田舎院のみくしあまの河をいさく  
あまの河をいさくあまの河をいさくあまの河をいさく



らり同乃大々人面よそさつし進乃乃のよらされて  
ゆるりかふす物めとらつきてゆるり

中務

<sup>少林</sup>あまの河くをさそくしきいふにのの風と打わうとまう

元補

天の扇の風よきらふれてそすすむ口乃新志と一

たすし此時淨屏風七月七日秋とひく女あり

源一いふ

しなをまをやうひのまいふはくのあぬ別とひくしとあね

仁和淨屏風よ七月七日女乃河あえらるる取

平定文

仁和寺丸末御  
定文を不宅

水のあやとくしりてまじぬきらとどなるらやの衣よふ

七月七日いみゆるり

藤原義孝

在りすの春宮控所

秋風よるるつちの事とくむいりけり世よるあふじとす

寐眼のまろくしあまらりわらるそ七月七日舟り

のりゆるりよしつらうらる

右末門侍上代

天の河のれきよふけらあふらうしりしぬあてらる

七夕後物よみつおらうらうらうらうらうらうらうらうら

乃る也よ

はらゆき

<sup>花上</sup>あじふすていひのそよよあふねなはるるに秋をさゆ

影ららす

よみ人しらす

じりまきいせのふとさなやまの秋のまじり

天曆師屏風よ

<sup>後撰</sup>ちやくくはよきすすつあは秋を霧えりすやあ

三條太政大臣家そふ人あつめてあまの歌よ

ませゆるりふきありりの花とす事よ

源重之

ゆく水の岸うづつ女前を去のひめ浪や思うらん

房の前裁刃女とてまじり

信正編年

<sup>妙佳上</sup>うしろを何ふかをまじり人のあまをわらふ

影ららす

よみ人しらす

<sup>七佳上</sup>秋の野の花のまじりすていひ衣のふく

あまのの中にふくまじりわらふ人あま

回轉院の屏風よ秋のまじり花をさゆ

まじりあまのまじりあま

平為盛

家いよあまの花はらすまじりあまのまじり

なほまゝに...

しんゆわ

<sup>サ催上</sup> とうとうとねまなす... 中宮の御は

歌

少秋ア... 中宮の御は

しんゆわ

ゆき... 中宮の御は

中宮の御は

よこゆり

善滋為政

九重の内は...

延享九年九月十三日西屏風は月舟上のつりて

板橋

しんゆわ

さき... 月よ人の家

月よ人の家

月

しんゆわ

水のたもや...

清信五十七賀の屏風

しんゆわ

ちんちん...

影... 善徳姫

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

人まら

庭草よじりあふりてしら秋のよきけに秋のよき

三百六十首のよき

うら

秋風のよきあふりてしらあはきりあはきりあはきり

右大相定國家より屏風

みつね

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

あゝぬ人よとせぬつとよよ秋のつとよとあはきり

女

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

かきつらぬ

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

かきつらぬ

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

かきつらぬ

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

かきつらぬ

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

かきつらぬ

かきつらぬ

かきつらぬ

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

かきつらぬ

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

かきつらぬ

かきつらぬ

秋の風よちりておのづからささるるをよみてはなほなほ

近世浄時月次山屏風のうへ

みつね

<sup>少信上</sup> ちかきつとこ田の稻とほいこいよのらり海女とみ

らんくよ秋うらむしよらり舟のたつと

尺ゆく

惠慶法師

<sup>廿作上</sup> かくらよそまうりのあまもし今に

影うす

よこくさ

久高月とほけのらりこいよとすうらり

高西院と井は御幸ありて行幸もありぬ

ありとあせくまよこいよとすうらり

小一條大政大臣 貞信云

<sup>廿作上</sup> 小倉山峯のらり心ありて

そいんのとみらのらりゆかきるる屏風よ

大中臣徳宣

ありとよらりてやそくむあ紅葉の錦と

影うす

よみくさ

白浪ありとすやのらりあまきと

みつね

ありとあまらりてあまのらりよらり

齊院御屏風

水のたまり深く浅くして人の中が縁の多き方せり

内裏御屏風 清原元輔

<sup>サ佐上</sup>月影のまらうに所よきよなれ細代よいたあふり

花人所よまらうにひらりひいたあふり

とて京よゆまらうをまらうにゆりあふり

修理 内近元藤吉行女

<sup>サ佐上</sup>して花あしうのむねまらうはまらうあふりて我とて

新しらす 人しらす

まらうにまらうのまらうにまらうにまらうにまらうに

九月つこまらうのまらうに女野よあふり

源一とて

まらうのまらうにまらうにまらうにまらうに

十月つこまらうのまらうにまらうにまらうに

ゆまらうよまらうに 清原元輔

秋のまらうにまらうにまらうにまらうに

みまらうを 一とて

うまらうのまらうにまらうにまらうにまらうに

十月一とて 人

源一とて

<sup>五松戸</sup>名よまらうにまらうにまらうにまらうに

そむのまゝはあしてゐるはぢのまゝあつてゐる

みつね

<sup>少下</sup>のりたりとあつては神を月とてふふふとあつて

天曆四時作場家の某よりあつたはつて

申務

<sup>少上</sup>くわつてあつてやのまのまをあつてあつてあつて

いぬ

天曆神製

<sup>少下</sup>芳ら若くはあつてあつてあつてあつてあつて

権中納言義懐入道にてあつてあつてあつてあつて

やあいつあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あなつてあつてあつてあつてあつてあつて

<sup>少上</sup>ふらのがまゝあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

曾孫あつて

ふ山本とあつてあつてあつてあつてあつてあつて

よあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

高岳相やり家よそのあつてあつてあつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

急の使よあつてあつてあつてあつてあつてあつて



すのりまづらうららきとそくそくまきまき

東宮女蔵人た近

<sup>小佳上</sup> 浪りくそくとすれれ 葦川の舟井れねと揺りこり

をらよあそりたるくのこふまらりあのたれねと

さうまよひつき風うていこりまき(ま)

うーのよ

<sup>小佳上</sup> ありあもの飛らうとれ 盃よ日けしそひんてぬ

右大臣恒作家屏風よ時意うきころあよ

ひつちん

<sup>小佳上</sup> あいあいのあよすむらねと神まつころころ

新しき

よこ人し次

ちよある神のりまよあつてえりう歌中よ

ころゆき

<sup>小佳上</sup> じり神さうきまじりも接うらう毛雪のふん

雪とーさくのころあつて尺ゆらりよあつく

きくゆあれた 中務のみこ 具平

わらみしゆきけのねんらりらあーんくたどあり

くしゆいあうら雪まほしくも神のしよは浪えらあ

東宮乃以屏風よ冬野やく

藤原通頼

加賀守 藤原下  
右中弁 雅枝男



拾遺和歌集卷第十八

雜賀

延喜二年五月中宮御屏風元日

紀貫之

昨日のらなるとあすも春の始りすまは有る

屏風下

伴路

<sup>サ佳上</sup> くらりとあすもあすも春の始りすまは有る

九條右大臣御賀屏風よ竹あり前よ花あり本

ちりくあり

むしすき

花のよしのきさうの南よ竹ありあまのよしのきさうの

<sup>為文</sup> 昔のあまのつひの朝はまのつひのあまのつひのあまのつひの

いよのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

あまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

ようつせよかろいおのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

東宮のつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

むらよひのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

いよのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

賀屏風へのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

貫之

木のつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひのあまのつひの

冷泉院のまゝのみこころさだむらゝるいしと  
せしゆらり 尤大臣

ふらふのねよこころいじまかしく海よまわらぬおねたひ  
ありんか産してゆらり七夜

せしすぢ

ねこのかろ枝とこころあそとらりすつらひあは

大貳國章じりこころあつらひこころいしと

あよこせら

まろ昔らとせとねたたいまわらぬいしと

影らりす

ふらりーはぢ

我らやこころてく高洲のたのめそらねこころ

近世以時海院屏風可括きくよらり

はらゆぢ

ふらふのねと昔らたららる浪やうすこころい

人のうらりーゆらりよ

せしすぢ

こころあひく言とくあは信の山乃峯とくねじ

天曆以時回裏とて為平のみこころあひゆらりよ

糸織奴古

<sup>少佐と</sup>もくまはらせの事わがれまよのあはらり

五月の日にしるしをたづねてはかたじけなくもすまじき事なり  
ていふまじき朝にむしりあはれ心なすて

春宮の更道姫母 長保三年權立

いづれもあはれみはゆるりみらむせの月ころりひびき  
天竺の年右大臣の十賀屏風よ

清原元輔

ちよせし君しよまはせしきのおめりしよえごめ  
東三條院の賀た大臣のしるしよりむらめり  
あそりてしよしよのしるし

右の待つ侍るに

きりかきよしよのしるしはかたじけなくもすまじき事なり  
右大臣家のつらあはれしよのしるしはかたじけなくもすまじき事なり  
いづれもあはれみはゆるりみらむせの月ころりひびき  
といふまじき朝にむしりあはれ心なすて

すまじき事なりしよのしるしはかたじけなくもすまじき事なり  
あはれ人の賀しよのしるしはかたじけなくもすまじき事なり

権中納言致忠

少佐  
ちよせし君しよのしるしはかたじけなくもすまじき事なり  
清和の女七つみころり十賀重明のみころりしるし  
時の屏風は竹よ害しよのしるしはかたじけなくもすまじき事なり

きんぐり

<sup>右位上</sup>あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる  
こをみよのつらなるよとてはたかひのつらなる

あしすま

あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる  
あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる  
あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる  
あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる

右大の實貨

流俗のいろよをあらはす梅花

むねのつらなる

弥重とてきぬとていふ

あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる  
あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる  
あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる  
あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる

あしすま

あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる

藤原忠表朝臣右兵衛督

あまのつらなるをみよのよとてはたかひのつらなる

あしすま

かからしあむいらいむよはかりすかん

むろいひのむねをいひかへてなれくはらむ  
しむくしむくしむく

くらすしむくしむくしむくしむくしむくしむく  
こむやういれもむらいつるむらむらむらむら  
よめよむくしむくしむくしむくしむくしむく

天曆御製

しれあきて今ねむくむらむらむらむら  
御前よあむくしむくしむくしむくしむく

志きのむくしむくしむくしむくしむく

夢よあしき人もむらむらむらむら

目よあしき人もむらむらむらむらむらむら  
きんかかきむらむらむらむらむらむらむら  
つらむらむらむらむらむらむらむら

人あしき人もむらむらむらむらむらむら

良筆宗貞

夢よあしき人もむらむらむらむらむらむら

平定文

しむくしむくしむくしむくしむくしむくしむく  
よめい人もむらむらむらむらむらむら

<sup>若上</sup> 花の末を今ハリノまよき春ハひくくハて丸くハる跡ハみよ人ハをハひハり  
 友の病をハ火とけハ母ハ母ハとありハてつハまハきハ人ハかハりハつハつハ也  
 心ハせりハ佛ハよハたハりハとハてハ老ハハハ我ハをハ浄ハ土ハのハあハりハあハりハ  
 灌仏のハらハはハとハ見ハ徳ハてハ灌ハ仏ハ日ハ女ハのハ布ハ施ハ童ハ女ハ持ハ衆ハ也  
各人持拍也  
<sup>若上</sup> 唐ハ衣ハをハのハりハたハつハ水ハうハてハつハ神ハあハとハ物ハやハたハよハあハり  
 修理ハ大ハ丈ハ惟ハ正ハのハ家ハよハ方ハ々ハ人ハよハまハりハちハりハきハりハふハりハ  
 てハゆハりハ物ハよハうハさハつハきハるハりハ

藤原義孝 右をサね

<sup>若上</sup> けハろハろハ人ハよハうハうハしハきハきハのハ枕ハうハてハいハいハよハねハめハまハて  
 ちハりハサハねハうハるハをハゆハりハ前ハよハ各ハ部ハ御ハ被ハ平ハのハみハ西

こそサねるまハきハつハおハらハらハいハとハをハゆハりハとハらハりハ  
 きハつハてハつハのハみハにハれハらハいハめハつハはハらハきハらハ  
 あハらハいハつハのハねハはハいハあハらハいハつハのハねハはハいハあハらハいハつハ  
 ちハのハいハらハりハのハみハはハいハらハりハきハらハ

平ら誠

かしみのハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハ  
 年月ハよハてハきハまハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハ  
 今ハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハ  
 つハれハしハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハ  
 存ハいハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハのハみハはハいハらハいハつハ



ふみ人一源

<sup>少佳上</sup>公ありてさよまあきす世中よありやう一尾のきう海りきな  
だういりり人のいさうなをせすゆれたさう  
とつははちとて

<sup>少佳上</sup>きみととていふ人ぬんぬぬ竹乃ありたうたう  
延徳十七年八月宣方よりてよとゆらり

紀貫之

いぬ人ときいよまらつてふの月とあされいぬぬ  
柿本人麿

万あつとゆいきいひすこすあさすこえををあて  
しとみあ

春日使よまらりてうりてするくら女のめいふつ

と一宗歌 一條樺政

<sup>少佳上</sup>くれとくけでかういあま事のいよりれはのすうい  
あつまらあつあつこまらりのありてされくめいひ  
くら女のりいしまらりくらけらあつていよまらり  
そまらいをゆれい

よみ人一源

<sup>少佳上</sup>なつととたのまういあつまらりのまをらひり  
女ありあつはらりあつまらりつまやい  
あしとせらりあれい



高潜成忠女

正二位成忠

夢とつと思ふりし世中とかな小今更よきとありし  
源成忠朝臣

人ものなり若きみとわさぬさくときしとひき  
た大將海時ありしとてゆかり女にけしとあり  
くそりそりしとありは実本朝臣平使とてそり  
けりおつきてこわしひつはけしとあり

藤原海生の女

女御

けりてこきおの杉系きとれと口身ありとてしけきとれ

成房朝臣は仰よありしとていじろよとあり

正二位下名の中 長保四年出家した中の義懐男

京の家よまらけしとてありしとてあり

つきてしきてあり

則忠朝臣女

三位則忠

こきとつとぬかりしとてありしとてあり

拾遺和歌集卷第十九

雜意

影一す

栞本人磨

万をよめる神のふりまのひさしをいふ  
いふはまはうてあしてゆるぐ女のあはれは  
いふもいふはうてあは

平定文

いふら社のふりまのひさしをいふ

影一す

栞本人磨

万いふら社のふりまのひさしをいふ

大中臣経直

少佐と  
あはれみのふりまのひさしをいふ

よみ人あはれ

あはれみのふりまのひさしをいふ

少佐と  
あはれみのふりまのひさしをいふ

贈太政大臣兼

あはれみのふりまのひさしをいふ

影一す

少佐と  
あはれみのふりまのひさしをいふ

あはれみのふりまのひさしをいふ

いづれにこそおぼしめされし御心  
まじりておぼしめされし御心  
なほよあまの御心

小野宮太政大臣

人よあまの御心

あまの御心 明日香采女

池水のうらふあてにおねあふらふ人あまの御心  
中納言教書多依は侍多しあまの御心  
て侍はあまの御心

右近 季繩女

少佐上

人よあまの御心  
あまの御心  
あまの御心  
あまの御心

少佐上

あまの御心  
あまの御心

あまの御心  
あまの御心  
あまの御心

あまの御心

はつらつとすむる女よらふらつとすむる  
ゆるゆるとすむる女よらふらつとすむる  
にやふらつとすむる女よらふらつとすむる  
つらつとすむる女よらふらつとすむる

<sup>少佐上</sup>有とていふ世のあつたうらむる女よらふらつとすむる  
あつたうらむる女よらふらつとすむる  
つらつとすむる女よらふらつとすむる

<sup>在</sup>しむる世のあつたうらむる女よらふらつとすむる  
三條のあつたうらむる女よらふらつとすむる  
あつたうらむる女よらふらつとすむる  
つらつとすむる女よらふらつとすむる  
あつたうらむる女よらふらつとすむる  
つらつとすむる女よらふらつとすむる  
あつたうらむる女よらふらつとすむる  
つらつとすむる女よらふらつとすむる

歌しうらな

せおのあいははいらさくろく人のせと流すはあ  
こくもいさあは池のあつあつとこれあつあ

在原業平朝臣

うめいとわらん人のいそく多よたよてふ事のみつと  
賀茂朝野意の使よらてのあつとようあつと  
よあてた大臣のよ方のいそつとつとつと

吾妻 糸織屋女

ちるあかかの何あつとつとつとつとつとつとつと  
歌しうらな

母中さつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
じれ本中じつとつとつとつとつとつとつとつと  
世中いさつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
伴とみよゆつとつとつとつとつとつとつとつと

人まら

いさみのくつとつとつとつとつとつとつとつと  
いさみのくつとつとつとつとつとつとつとつと  
いさみのくつとつとつとつとつとつとつとつと

いさみのくつとつとつとつとつとつとつとつと  
いさみのくつとつとつとつとつとつとつとつと  
いさみのくつとつとつとつとつとつとつとつと

つら〜きり

天香御歌

君との思をりつて祈りし心ありきりぬり〜  
こゝたより人の海よつと〜きり

は〜ゆい

思ひあはれ〜  
き

歌〜きり

人まり

山〜あはれ〜  
春日宮井〜  
物まより〜

坂上邸女

七位上

人のあま〜  
あま〜

惠美は師

少列ア

仁和御屏風よあ〜  
仁

大中臣頼基

し〜  
まう〜  
よ〜

あ〜



ふしきり

あひら

あはれいひのむねはくしきりしうらみある者のあひら  
申すむらりあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひら

むらりの年かろくむらりしむらりあひらあひらあひら  
あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

紅郎女よとくりあひら

中絶言家帖

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

あひらあひらあひらあひらあひらあひらあひらあひら

おのれをいふは

けふもあすもいふおのれ白菊のしらすもあつた  
忠君宰相後身まよひのふかきあはれもつらうらやまひして  
あつたうらやまひもあつたあつたあつたあつたあつた  
とてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

涙のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
延長河内松家のみやとあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

昔のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

山住上  
影らす 伊勢

我はあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

山住上  
伊勢

一條樗政下らうらやまひのふかきあはれもつらうらやまひ  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

本院侍注

<sup>少佳</sup>うれあぬ事もあつとていふはなほいふつらとていふはあはれ

影うらや

いふつらとていふはあはれ

みらするまのつとほくあつとつらなれ我はつらありはれ  
あはれいふまの事とていふはあはれいふつらとていふはあはれ  
延秋浮世中宮屏風よ

いふつらとていふはあはれ

<sup>少佳</sup>いふつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ  
いふつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ  
いふつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ  
いふつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ  
藤原長法

<sup>少佳</sup>我はつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ

猶あつとつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ

いふつらとていふはあはれ

<sup>少佳</sup>流るるつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ

元良の女いふつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ

いふつらとていふはあはれ

思はつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ

女のつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ

いふつらとていふはあはれ

いふつらとていふはあはれいふつらとていふはあはれ

影しらす

しむかき

むらとせとつこきは高砂の松のまきはういかり  
三條右大臣の屏風

むらうあまのゆい方はいまの長と人と思はれ

年のとけりよふまらゆる人ゆいなる

たのちつ別一人ともうたふの年をまてしうりし

拾遺和歌集卷第二十

哀傷

ひと死よまらりてわくふのこは春さうの花

ゆらよ家の花とていつかよあそびとつと

ふ影とよゆらり 小野宮太政大臣

<sup>下</sup>ゆら花のこきうりけりまきとこつら源をまらむらり

平通盛

<sup>上</sup>たのちよあまのこはら橋をくせの春とこむじとすむ

清原元輔

<sup>上</sup>花のあまよあまの春のなれあふかたわらぬ露よえ有る

大中後緒宣

少在下一

楊むらりおのうらむるたにあらむ物と思ふなり

いふ事よきうてのりい

大納言延文

少同

志まらりてわらむ花風のふらむきくさる

中納言敦基まらりてのりひのうらむ

よゆるりしはく人くまらりて花人ゆかりよ

一條持政

少在二

あふらりや人の情御花こり今も昔も

天曆のみくかられまじして人のこれぬ月あよ

宮内卿のなみらりてのりい

坂河用白也

女蔵人冬庫

は月まてなみらりてあや思ふなりねえあられ

あふらりてのりい水よらりてのりい

あふらりてのりい年のたをてのりい

栗田右大臣 用白道也

あふらりてのりいあふらりてのりい

右大臣のよきまらりてのりい

つらりてのりい 右大臣 顕文

少在下一  
こいふつむくあふらりてのりい

あさるの花と人の心をゆつとすそ

藤原道信朝臣 信正と云ふ  
二曆五年辛未

<sup>少佐下</sup>あさるの心と人の心と思ひし人よと花さき花さき

友とてその心みりあらるの心げりあつきて女力

あみこのりこよ 盛子内親王

天曆御製

あつてけいれの紅葉のりよらりいふゆこのりこきひかむ

書のみくけりてゆきりあら秋風乃よきじあき

きれ

大貳回章

あきや秋のよ風のこじりあきあきあきあきあきあきあき

中まくれまいてる年の秋以前乃前秋つゆ

ろときききききき風のあきあきあきあきあきあき

天曆御製

<sup>少佐下</sup>秋風よりひく葉葉のつゆりききききききあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

人まら

<sup>万</sup>こころ見て秋の月影をせもあきあきあきあきあきあき

朱雀院乃西宮十九日のはききききききききききき

きりりのころわらりてゆきりききききききききき

権中納言教忠

天曆六年癸亥  
朔建御旅

君ありてまゐりまきり、藤原池をきりたうしうりけり  
はつたけの池やうねり身あけりたうとて

人まら

<sup>少信下</sup> 日まのりおくむいよはつたけの池やうねりたうとて

影しうす くらんくしうす

<sup>少信下</sup> うもあはれきせよよみあめ初め神志おきぬらそ

眼ぬきゆと

<sup>少信下</sup> ありたうてきうの涙はきういよまがはる水うたう

<sup>在介</sup> 藤原とうくいはまきしうの涙のむれとやなうらむ

恒流の眼ぬきゆと 正暦四年

藤原道信朝臣

<sup>少信下</sup> 涙のこきふぬきゆとては春衣とておきぬは涙なりけり

うのあめりたうりけりたうりけり人、重眼とてま

なうらてまがはるはあめよひたうしう

ゆかり

<sup>少信下</sup> 今こいぬらまきゆとてはあめあうの涙

思ふあめとてなすけりうらうらゆかり

久江為基

<sup>少信下</sup> 藤原あいらんくしうとて思ふまらうりてなすけりあめ

<sup>少信</sup> 年すしうりたうりけりたうりてあめあうの涙

影らりす

しんしん

長

墨澤の衣の袖の雲も海の水もすすめり

誦徳のり北方をりこしもなくありてのり

おまじしとつたりなりあまのあはれをせむゆゑあはれを

あまのあはれをせむゆゑあはれを

くを見ゆる

藤原為頼

サ下

常あはれをせむゆゑあはれを

右衛門督云仁

少四

常あはれをせむゆゑあはれを

おまよふてゆるりあはれを

きれえ

伴峯

少下

常あはれをせむゆゑあはれを

影らりす

しんしん

サ下

常あはれをせむゆゑあはれを

おまよふてゆるりあはれを

清原元輔

サ下

常あはれをせむゆゑあはれを

子よよくしてよみゆる

平益盛

サ下

常あはれをせむゆゑあはれを

常



大納言胡亥のじすめの女流まうりくくれぬかた  
とききゆてつくりりいよとせてゆかりあり  
馬助らうけうちくさちてゆれ

藤原共政胡亥毒

我の女やうよるうきとばんと君もあけく園見あり  
やう

うきやうはあつちうとあはれ海のこたあつち  
うきとさつちうけりみこのなくちりてうき  
と一郭ととききて

伊勢

<sup>ヤ色下</sup>あての山こてきろん郭とくひあつちうき  
伊勢うりよこあ事とくえよつちんすま

平定文

<sup>ヤ色下</sup>思ふらりよとらうあ成ぬとくしていよれを  
中納言道輔ちりかりてゆかり年の一とすよ  
つちいよちりておいゆかりついでよ

はつちあ

<sup>ヤ色下</sup>こあさふ年のくあとなとくあつちいよれを  
<sup>後撰</sup>あつちかりてあつちいよれをあつちかりよれと  
あつちいよれ

ふんしん

少作下

あせん思ふ事もつこいぬきまじりてこころあはれ  
こころあはれ人のこころあはれ春もつこいこれ今に  
こころあはれ人のこころあはれこころあはれ

少作下

春の花枯れ紅葉とちりてたらぬまのこころあはれ  
こころあはれ人のこころあはれ

中勢

少作下

こころあはれ人のこころあはれこころあはれ  
こころあはれ人のこころあはれ

少作下

こころあはれ人のこころあはれこころあはれ  
こころあはれ人のこころあはれ

影一す

ふんしん

少作下

あせん思ふ事もつこいぬきまじりてこころあはれ  
こころあはれ人のこころあはれ

ふんしん

少作下

あせん思ふ事もつこいぬきまじりてこころあはれ  
こころあはれ人のこころあはれ

少作下

あせん思ふ事もつこいぬきまじりてこころあはれ  
こころあはれ人のこころあはれ

ふんしん

亭

あそ〜ぬつりかたなむ〜むめけけい〜う〜あ〜り

亭

あそ〜むらり〜う〜あ〜り

亭

あそ〜むらり〜う〜あ〜り

万

家よきそ〜り〜あ〜り

万

ま〜り〜あ〜り

万

あそ〜むらり〜う〜あ〜り

万

あそ〜むらり〜う〜あ〜り

紀丹次

少下

あそ〜むらり〜う〜あ〜り

家乃集よりきてけ

朱堂院うせきせけり〜あ〜り

あそ〜むらり〜う〜あ〜り

たまひ〜

あそ〜むらり〜う〜あ〜り



題ありき

わこ人しん

少信下

幸半丸車ありきは男の家とていふ

法師よあしとけりる雷のりけし

つみゆきとけりる

藤原高光

少信下

世にあらそくき白雲れはなきあつ物とて

眼子ゆりるあをしりてゆりる女ありき

あゆみとてけりる

わこ人しん

すみああ我のしん思ふき世とていふ

わこ人しん

いんをあり衣とていふ我のしんああ

成信重家ら出家しゆりるああ

よしつら

成信注四信上重家注四信下

長保三年二月三日出家

右末門侍公任

思ふ人しん有る世中とていふ

廿細き藤原統理し年とていふ

志賀して出家しゆりる

いんあしゆりる風とていふ

女院の講捧ゆりる

よるのきり

齋院

こまつく原をさし河のりめあはれつりけうきつよあふぬあり  
天曆御時放きさいのまのり以賀をいせたまふむと  
ゆふと宮うせ給ふりしとやてそのまうきして御  
視通とこあせねるる時

御製

うらうらと君とと母のつあふとけりのたよえりふつはら  
為雅朝臣普門寺と從信養一ゆてよの目れ  
くしゆわとまじつりゆけつてよよのあまうりて  
ゆふのあ花のかりうらるるあま

春宮大史道徳母

<sup>少佳下</sup> 今さまの事、ゆかりよとこよとよさたのこらうにうらん  
た大御海時白河まで流れせきをゆきりよ

實方朝臣

きふりの霧のいばりま折るる蓮のふのいまちあはれ  
とこらえ一ゆふりのくわくあはれゆきれいえたは  
ゆらゆりのくろねまふゆあうけたのあうり  
あつまおとらうてよもゆふら

<sup>少佳下</sup> あはれおとらうちりのあつあつあまうくふらてあまじあ  
<sup>言字とんせ</sup> 此宮上人のゆきよあつてつらうら  
<sup>終人</sup>



馬とてゆりてゆりすありとあまてうらほひま  
しむれえそくくまりたふじふはり馬りたりて  
うらり人のこしよあゆむすなはししてしむれ  
うらりうらとあまてうらり人のこしよあゆむ  
とよみくのいまうく  
あまてうらり人のこしよあゆむすなはししてしむれ  
よれくはあまてうらり人のこしよあゆむすな  
せりくはあまてうらり人のこしよあゆむすな  
うらり人のこしよあゆむすなはししてしむれ  
伴家とよみのと何のこしよあゆむすなはししてしむれ

つむいさみのこしよあゆむすなはししてしむれ

天福元年仲秋中旬の七旬有餘之  
旨目重の愚本書之八箇日終切

聖日し續合流

此集世之所傳無指證本仍の較多舊本  
校合は是の言要程也去不審  
又第合抄し後本

抄哥五百九十言首 上二百廿五、下三百廿九、

其六中



癒上

中納言師氏

思つて一冊の年と一冊の年と大いなる物ははるかに

或年云々 入後撰

影しらす

赤深米門

口やとの松さしりり毛さりけりすきひりあはるる

此二首集不見也

五百九十二首 集抄今相違

拾遺抄奇

春 九十七

夏 可二

秋 可九

冬 可二

賀 可一

別 可三

癒上

七十九 一首集不見或年云々

癒下

七十八 一首集不見

雑上 百廿二

雑下 八十六

已上 五百九十四首

世本村属丈夫為相

類吟六十八素門轉費判

心相傳秘考

祇文卿 高筆

白と云

写校合訖

徳治三年八月十七日

糸原藤原朝臣判

此中付取文書

五百九十

...

...

...

...

...

...



